

公開講演会

「反アパルトヘイト運動を記憶する」

(2016年12月17日開催)

講演・質疑の記録

立教大学共生社会研究センター

## 目次

プログラム.....	2
講師プロフィール.....	3
講演会の記録.....	4
楠原彰さん「遠い国の人びとの深い悲しみや怒りと向き合うーまた、その<記憶>の残し方」.....	6
下垣桂二さん「関西の反アパルトヘイト運動は反差別、人権のたたかいとともに」.....	17
牧野久美子さん「反アパルトヘイト運動は世界でどう記録／記憶されてきたか」.....	26
コメント 西原廉太（立教大学大学院キリスト教学研究科教授）.....	35
ディスカッション.....	39

## プログラム

日時：2016年12月17日（土）14：00～17：00

会場：立教大学池袋キャンパス 11号館 A203教室

主催：立教大学共生社会研究センター

共催：\*立教大学大学院キリスト教学研究科

\*基盤研究（C）「反アパルトヘイト国際連帯運動の研究：日本の事例を中心として」

課題番号 26380227（研究代表者：牧野久美子）

後援：特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会

14:00 開会（沼尻 晃伸・立教大学共生社会研究センター長）

14:05 楠原 彰さん（前・日本反アパルトヘイト委員会／國學院大學名誉教授）

「遠い国の人びとの深い悲しみや怒りと向き合う

—また、その＜記憶＞の残し方」

14:35 下垣 桂二さん（関西・南部アフリカネットワーク世話人）

「関西の反アパルトヘイト運動は

反差別、人権のたたかいとともに」

15:05 牧野 久美子さん（(独)日本貿易振興機構アジア経済研究所研究員／

(特活)アフリカ日本協議会理事)

「反アパルトヘイト運動は世界でどう記録／記憶されてきたか」

15:35 休憩（15分）

15:50 コメント：西原 廉太（立教大学大学院キリスト教学研究科教授）

16:00 討論と質疑

司会：石井 正子（立教大学異文化コミュニケーション学部教授）

17:00 閉会

## 講師プロフィール

### 楠原 彰さん（前・日本反アパルトヘイト委員会／國學院大學名誉教授）

日本社会が経済を中心に南アのアパルトヘイト体制に組み込まれていく 1960 年代半ばから、90 年代前半アパルトヘイト体制が崩壊し新生南ア共和国が誕生する 90 年代半ばまで、反アパルトヘイト運動に関わる。人間を差別し対立させ非人間化する凄惨な南アのアパルトヘイト（人種隔離政策）と、日本の子ども・若者に対する日本の政治や教育による他者・社会・世界からの＜隔離＞（もう一つのアパルトヘイト）の問題を考えてきた。

### 下垣 桂二さん（関西・南部アフリカネットワーク・世話人）

関西を中心に活動した反アパルトヘイト市民運動に 1970 年から参加。1990 年のネルソン・マンデラ歓迎西日本集会では事務局長。主な著書に『ポスト・アパルトヘイト』（共著、日本評論社、1992 年）、『南アフリカを知るための 60 章』（共著、明石書店、201 年）など。

### 牧野 久美子さん（（独）日本貿易振興機構アジア経済研究所研究員／

（特活）アフリカ日本協議会理事）

南アフリカの政治経済、とくに公共政策形成における市民社会組織や社会運動の役割を主な研究領域とする。また、2014 年度より科研費基盤研究（C）「反アパルトヘイト国際連帯運動の研究：日本の事例を中心として」研究代表者として、日本の反アパルトヘイト運動に関する調査を実施。主な著作に『南アフリカの経済社会変容』（共編著、アジア経済研究所、2013 年）、『新興諸国の現金給付政策』（共編著、アジア経済研究所、2015 年）など。

## 講演会の記録

○司会（石井） 本日はお寒い中、公開講演会「反アパルトヘイト運動を記憶する」にお集まりいただき、ありがとうございます。

本日の司会を務めさせていただきます、石井と申します。立教大学共生社会研究センターの運営委員を務めております。よろしくお願いいたします。

本日は、皆さまと一緒に、反アパルトヘイト運動について学ばせていただくことを、とても楽しみにしております。

この公開講演会は、キリスト教学研究科、そして本日ご登壇くださる牧野久美子さんの科研費基盤研究（C）「反アパルトヘイト国際連帯運動の研究：日本の事例を中心として」にご共催いただいております。また、NPO法人アフリカ日本協議会からもご後援いただいております。この場を借りて、ご協力に御礼申し上げます。

それでは、まず初めに、立教大学共生社会研究センター長の沼尻晃伸から、皆さまにご挨拶申し上げます。

○沼尻 皆さん、こんにちは。

今日は寒い中をご来場いただき、まことにありがとうございます。

立教大学共生社会研究センターという名前に、あまりなじみのない方もおいでかと思い、お手元にセンターのリーフレットをお配りしております。立教大学内の研究センターとして、ご承知おきいただければというふうに思います。

本日、この「反アパルトヘイト運動を記憶する」という講演会を企画いたしました理由は、極めて明確です。それは何かというと、反アパルトヘイト運動に関する膨大な資料を、共生社会研究センターにご寄贈いただいたことです。そして、寄贈にあたってお骨折りいただいた三人の方が、これからお話しいただく楠原さん、下垣さん、そして牧野さんです。

この資料群、どのくらい膨大かと申しますと、実は、私、昨日、書庫に資料を拝見しに行きました。一夜漬けにも及びませんが、せめて1時間漬けで何かわかることがないかと。しかし、とてもとても1時間で見ることにはできません。見た感じでは、大きな書棚三つ分ぐらいはあるのではないかと思います。そう申し上げても、どんな量かはピンと来ないかもしれませんが、とにかくたいへんな量の反アパルトヘイト運動の資料を、ご寄贈いただいたわけです。

もちろん皆さんも、一部まだ公開できていない部分もありますけれども、ご覧いただけますので、ご関心がある方はぜひご来館いただければと思います。これは本当に私自身の不勉強なのですけれども、私が感銘を受けたのは、日本の反アパルトヘイト運動というのは、ほんとうに歴史のある、60年代からずっと続いていた運動なのだということです。

今日はそうした歴史の一端を示す資料の一部を会場内に展示しておりますので、休憩時間などにご覧いただければと思います。

本日は客席にどこか同窓会のような雰囲気も感じられ、おそらく当事者の方々からすれば「そんなの当たり前だ」とお叱りを受けそうなのですけれども、私のような新米からすると、資料からあらためて、歴史のある運動だということを感じさせられまして、そうした資料を共生社会研究センターにご寄贈いただいたというのは、本当にありがたく、名誉なことだと感じております。

この寄贈をご縁に、ぜひこの運動について私たちも勉強してみたいと思ってこの講演会を企画したところ、お三方にお話しいただけることになり、とてもうれしく思っております。長い歴史を持つこの運動がどんなものであったか、短い時間で知ることができる—もちろんそのことは研究していく上での入り口ということにはなるかと思いますが—ことは、またとないチャンスであると思います。開場してから上映されていた映画<sup>1</sup>などを見て、それだけでどきどきしている次第です。

今日はぜひ、お三方のお話を伺ったうえで、討論の時間には皆さまにも、反アパルトヘイト運動の歴史、そして、現状のさまざまな諸問題、そこを架橋するような議論をしていただければと思います。

どうぞよろしく願いいたします。

○司会（石井） どうもありがとうございました。

本日のプログラムなのですけれども、まず3名の方に30分ずつご講演いただいた後に、休憩を挟みまして、コメントをいただき、その後1時間ほど皆さんとの質疑応答の時間を設けております。

それでは、最初の講演者である楠原彰さんをお迎えしたいと思います。

楠原さんは、私にご紹介するまでもないと思うのですけれども、60年代から90年代にかけて、反アパルトヘイト運動にかかわり、『アフリカは遠いか』（すずさわ書店、1981年）、『アフリカ

---

<sup>1</sup> リー・ハーシュ（監督）『アマンドラ！希望の歌』（2002年）の冒頭部分。

の飢えとアパルトヘイト—私たちにとってのアフリカ』(亜紀書房、1985年)などのご著書もあります。それでは、楠原さん、よろしくお願いいたします。

## 楠原彰さん講演

### 「遠い国の人びとの深い悲しみや怒りと向き合う—また、その〈記憶〉の残し方」

楠原です。しばらくです。皆さんにお会いできてとてもうれしいし、何十年間も一緒にかかわった人たちが来ておられるので、僕がそれを全部、その思いを伝えることはできない。非常に失礼なことがあるかもしれません。悲しい思いでお帰りにならないように。「あいつはいつもあんなやつだ」と思ってくださいばいいんです。

じつは、今日は何をしゃべろうかと思って一所懸命考えていました。会場にお見えになっている西原廉太先生が監修されたマイケル・ラプスレー (Michael Lapsley) の『記憶の癒し—アパルトヘイトとの闘いから世界へ』(聖公会出版、2014年) という本をここ1週間読んでいたのです。

この方は、ニュージーランド出身の方で聖公会の司祭ですけれども、20代のときに、アパルトヘイト問題を、自分の神との出会いのように感じ取られた方です。それで南アへ行かれて、反アパルトヘイト運動をアフリカ人たちと一緒にやっている間に、官憲から狙われて、国外に追い出される。追い出されても、なるべく南アに近いところで仕事したいというので、ジンバブエの教会で仕事しているときに、手紙爆弾で吹っ飛ばされたのです。南アフリカでは、この手紙爆弾で殺された人たちがたくさんいます。ルス・ファースト (Ruth First) などそうです。このラプスレーという人もそれにやられて、左目がほとんど見えなくなり、両手も失います。しかし、誰も助からないだろうと思ったのが助かって、今度はアパルトヘイトによって深く傷つけられた人たちの心の癒しの活動をされるようになった。そして今は世界を回って歩いていて、日本にも、東京・用賀の聖公会神学院にも来られました。そのときに僕、お会いしたのです。司祭の方ですから、非常に内面的な話をされた。そして今回、この本を読んで、「あ、こういうことをしゃべろうか」と思ったのです。つまり、反アパルトヘイト運動というのは、いろいろな人がいろいろな立場でかかわっていた。では、僕はどういう立場でかかわって、そして何をそこで学んだのかということを中心にお話ししたいと思うのです。

レジュメをお配りしてありますので、それを読みながらお話しさせていただきます。

最初にあらためてお断りしますが、このレジュメは、私の個人的な経験と記憶を中心にして、私が書いたレポートです。でも、今日おいで下さった方の、一人一人の個人史の中に、それぞれのアパルトヘイトとの関係とその記憶があるだろうと思います。

## 1. アフリカ大陸とそこに生きる人々と出会い・南アフリカを選ぶ—1960年代

僕の場合は、まず三つあるのです。まず一つ目は、青年時代というのはみんなそうなのですが、どこにも他者が存在しない、精神のアリ地獄のような「自己感溺」状態に苦しむ。私の20代、学生時代、それからモラトリアムの大学院生時代もそうでした。つまり他者がいないと人間として生きてはいけないということを薄々わかっていながらも、つまり、自分以外に世界や他者が存在するということが、自分の生き方とかかわって見つからなかった時代なんです。それが僕の20代でした。自分の悲しみや苦しみの周りをいつも空転して、人を傷つけて、これじゃだめだぞと。何か確かなものと出会わなきゃだめだぞ。確かな世界と出会って、向き合い続けないとだめだぞと思っていた。そうしなければ前に行けない。そんな状態ですから当然、大学を出ても就職など考えられない。何をしてもいいかわからない。他者が存在しない時代を、苦しんでおりました。

二つ目が、1960年代という時代です。60年代というのは、日本の高度経済成長がスタートするときです。日本が急激に—エコノミック・アニマルなんて、その20年後ぐらいに言われますけれども—経済を中心にいっきに豊かになろうとしていく時代で、僕のような若者にとってはそういう急激な経済成長中心の時代がこう、いっきに自己中心的な方向に行くというのが、非常につらかった。だからこそ、若者たちの闘いがたくさん起こったのだと思います。安保闘争が起こり、全共闘運動、学生運動が起こったり、ベトナム反戦運動が起こったり。

そういう中で、僕はなぜかアフリカと出会ってしまった。ちょうど60年代というのは、アフリカがいっきに世界史に登場してきた時代です。アフリカの独立のニュースを、新聞の一面トップ記事で毎日報じていた時代なのです。しかし、新聞は明るくアフリカの独立をたたえていた。東京オリンピックの閉会式で、独立したばかりのザンビアの選手が一人で行進する、そういう時代でもありました。

世界の近・現代史のシステムを見てみると、15世紀のコロンブスの大航海時代以降、世界は一つにさせられました。それまでは世界の国々にランクなどなかったのです。みんなそれぞれ対等な関係を持っていたのですけれども、大航海時代以降、世界はヨーロッパを中心にして、



序列社会に引きずり込まれていくわけです。そういうことが青年には見えるわけです。その世界史のどん底、被差別や被抑圧のどん底に置かれてきたアフリカでは、人びとが本来持っていた自尊感情が踏みにじられていった。

それから、僕がいちばんつらいと思ったのが、植民地支配によって自分以外のものに同化することを強いられてきた民族、ということです。ちょうどこれは僕のつらさと重なった。つまり、青年期というのは、自分以外のものに同化することを求められるんです。就職であるとか、何であるとか。自分はこう生きたいと思っても、「おまえはこう行け」と言われる。つまり学校の教師や親や、ジャーナリズムや、みんなが、「自分以外の者になれ」と言うのです。

そうした中で、アフリカこそ、どこよりもいちばん、自分以外のものに同化することを強制されてきた大陸であるというふうには僕には見えてきて、それでアフリカへ出かけていきます。ほぼ1年間の予定で、当時はお金がないですから、船で横浜から出て、アジアを經由してアフリカに行き、横浜に帰ってくることになりました。

この、アジア経由で行ったということが、僕にはどれだけプラスになったかわかりません。つまりアジア経由でアフリカへ入ることが、日本のアフリカ研究にとっては絶対必要だったと、僕は思うのです。フィリピンから始まって、香港へ行って、タイやベトナムへ行って、セイロン（当時）やインドへ行って、というように、フランスの船は旧植民地のアジアの港へ泊まりながら、航海を進めていく。そうすると、1966年ですから、否が応でも、まだ生々しい植民地支配や戦争の傷跡を目にすることになる。つまり、これを見てしまうと、アフリカへ入るといっても素手では入れない、日本人は手が汚れている、ということがわかる。シンガポールのど真ん中に、日本人による大虐殺の碑（日本占領時期死難人民記念碑）が立っているわけです。日本のアジア諸国への侵略や、朝鮮に対する植民地の歴史に気づかされていく。

1か所1～2泊ぐらいの短い停泊期間でしたが、あの経験が僕に、日本人の手はきれいではないぞという思いをさせてくれた。だから今、若いアフリカ研究者がすぐアフリカへ飛ぶのには反対なんです。「北方四島を返せ」などという話も、なぜ先住民の問題にならないのか、どうしてアイヌの問題にならないのかということが、見えてこないのです。まっすぐ行ってしまおうと。

そのように、アジアを經由してアフリカへ行ったのです。そして1年ぐらいいてみると、じつは僕は、アフリカは悲しみと怒りの大陸だと思っていたのですけれども、そうではないことがわかってくる。アフリカの人たち、アフリカの文化や歴史は一筋縄ではいかない。そこには錯綜した個人的・集団的経験や記憶があるのだということを初めて知りました。アフリカには、

悲しみと怒りだけではなくて、当然ながら互いに助け合う人間たちの喜びのコミュニティーがあった。

今日来てくださっているゴードン・ムアンギさん（四国学院大学）の村には何回も泊めてもらったのですが、みんなでジョーヒ（ギクユ民族の地酒）というお酒を飲みながら楽しむ。喜びや励まし、相互に助け合うコミュニティーが、タンザニアにも、ケニアにも、当時のウガンダにもたくさんありました。

ところが、それではすまないわけです。これは南アフリカ人が言った言葉ですが、*「アパルトヘイト政策への日本の加担をあなたは人間としてどう思うのか」*と。こういう問いをアフリカのあちこちで、とくに若い学生たちから受けるのです。これは糾弾ですよ。

僕はそのころ大学院生だったのですが、タンザニアの学生食堂などでは、「日本から来た」というと、「おお、よくこんなところへ来たものだ。おまえ、アパルトヘイトをどう思う？」なんて言われて、「どう思うって、まあ反アパルトヘイト運動を少しずつやろうと思っています」なんて返事をするわけです。すると「冗談じゃない。こんなところへ来るなら早く日本へ帰って反アパルトヘイト運動でもやったらどうだ」なんて言われる。もちろん半分冗談で言っているのがわかるし、言っている当人もエリートですから、僕だって「おまえだって何だよ」と言いたいところなんです、とにかくそういうことが、日常的にアフリカ大陸のあちこちで聞こえてくるわけです。

つまるところ日本は、さっきもアジアのことも言いましたが、アパルトヘイトに関しては手が汚れている。日本の高度経済成長は、南アへの日本の企業の進出とちょうど重なっています。それで、日本人は1961年に、オノラリー・ホワイト（honorary white：名誉白人）という、非常に恐るべき、神を冒瀆したような称号を南アの白人から与えられるのですが、それを最後まで返上できなかった。

なぜ南アの白人議会は、日本人にのみ特権を許したか。つまり白人の便所、白人の汽車、白人のレストランを使い、白人専用の居住区に住むことを日本人に許したかといえば、それは簡単なのです。商売上の理由です。じつは1930年代にも同じようなことが起こっているんです。1910～20年代、南ア連邦（当時）において「非白人」の処遇を受けていた日本は、「帝国」の威信と通商上の理由から日本人を白人扱いするということを当時のプレトリア政府に要求したのですが、おそらく1960年代も、レアメタルを輸入し、自動車や機械製品を輸出したいと目論ん

でいた日本政府と日本企業がそれを要求したのだらうと思います<sup>2</sup>。

そうした中、中ソ論争が起こって、日本の市民運動は全部ばらばらになっていくのです。中国とロシアのけんかで、日本の共産党と社会党がけんかして、原水禁運動などの市民運動が分裂していく。生まれたばかりの反アパルトヘイト運動もそうでした。なぜ中国とソ連がけんかして、日本の市民運動が分裂しなきゃならないのかと思うのですが、残念ながら分裂するわけです。そのときに、今日、渡辺一夫さんが見えですが、僕も一夫さんも当時は学生で、どうしようもなくなって、僕らは本やなんかで尊敬していたけれどもお会いしたことのない上原専禄さん（歴史家）に電話したのです。そうしたら、上原さんはご病気だったのですが、吉祥寺にあったお家に「いらっしゃいよ」というので、2人で行きました。そして、「どうしたら反アパルトヘイト運動が日本の中で定着するでしょうか」と伺ったら、一言ですよ。一言、こう言われたのです。「南アフリカのアフリカの人たちの解放と自由は、日本で生きている私たち一人一人の解放と自由の問題です。そのことをお考えになってみたらよいでしょう」

—この言葉を、僕らはずっと反芻してきました。「何なんだ、これは？」と。そんなことを言われたってわからないですよ。「日本人、おまえ何者か」という問いと同じです。それを僕らはずっと反芻してきた。

「抑圧からの人間の解放はつねに相互的である。一方だけが自由になることはない」ということは、パウロ・フレイレなどを讀んだりするうちにだんだんにわかってきた。つまり他者が抑圧されていて、それに向かい合っているときに、その他者だけが—抑圧されている人間だけが—自由になることなどあり得ない。抑圧している人間と一緒に自由にならなければいけない。つまり抑圧している人間も変わらなければ、抑圧されている人間は自由になれないということをおそらく上原さんはおっしゃっていたのだらうと思います。

## 2. なぜ、反アパルトヘイト運動をつづけることができたか

続いて第2の問題、なぜ反アパルトヘイト運動を続けることができたか、という点です。

僕は、ちょうど1964年から、1994年に南アが自由になって、なぜかその後1年間もたもたしていたのですけれども、1995年に行動委員会が解散するまで、数えてみると31年間、反アパルトヘイト運動に関わっていた。

なぜこんなに長く続けられたか。下垣さんも、会場におられる方も、多くはそうではないか

---

<sup>2</sup> 詳しくは、森川純『南アフリカと日本』（同文館、1988年）などを参照のこと。

と思いますが、長く続ければいいというものではないけれども、まあいい加減にやっていたから続いただけなのではないかと（笑）。

とはいえ、いくつか理由があると思います。まず一つ目は、過酷なアパルトヘイト政策の中で、人々が殺され続けたということです。僕らがいちばん最初に、殺されたと知ったのは、ミニ（Vuyisile Mini）という労働者です。ミュージシャンで、すばらしい詩人でもありました。ちょうどマンデラ（Nelson Mandela）たちがロベン島に送られ、運動は非合法になっていた。ミニとカインガ（Wilson Khayinga）とムカバ（Zinakile Mkaba）の3人が殺されたのですけれども、「ミニたちを救え」というこのビラ—僕が自分で書いた、生まれて初めての反アパルトヘイトのビラですけれども—これが僕らの最初のビラです。「叫ベアフリカ」と書いてあります。僕の場合は、アフリカ行動委員会をつくる以前は、「アジア・アフリカの仲間」という労働者や市民・学生のサークルをつくっていて、そのとき野間寛二郎さんたちと一緒にやったのが、「ミニを救え」とか「マンデラを救え」という運動だった。

とにかく、人々が殺され続けるのです。毎月のように、有名無名の、アパルトヘイトに抵抗する人たちの拘禁や殺害の知らせが、南アの解放組織や亡命者、あるいは欧米の反アパルトヘイト市民団体から送られてきた。それに応えないわけにいかないだろうというのが、非常に消極的な理由でした。つまり「もう嫌だよ、俺も就職しなきゃならないよ」なんて言いだすころになると、またぞろ電報が来たりして、「じゃあしょうがない、誰もデモをするやつがないんだったら、みんなで南ア総領事館（実質的には大使館）にデモに行こうよ」となる。70年代はほんとうにそうでした。私たちはへとへとになっていた。でも南アでは、人々は殺され続けた。

この写真の少年<sup>3</sup>は、『遠い夜明け』の主人公であるスティーヴ・ビコ（Steve Biko）が殺される前に殺された。1976年〔のソウェト蜂起のとき〕に最初に撃たれて殺された中学生なんですけれども、この少年の横にいる、これは近所のお兄さんなんですけど、このお兄さんはまだ南アに帰っていません。独立して何年もたつのに、彼も亡命して、帰っていない。おそらくもう生きてはいないのではないのでしょうか。彼の帰りをお母さんがずっと待っているんです。殺された少年の博物館（Hector Pieterse Museum）がヨハネスブルクのソウェト地区にできて、亡命した彼のお母さんは、その博物館の前で物を売って、彼の帰りを待っている。マンデラが大統領になっても、こんなケースがいくらかでもあるんです。最近聞いた話では、お母さんも、息

---

<sup>3</sup> ソウェト蜂起の際に撃たれて殺されたヘクター・ピーターソン（Hector Pieterse）。サム・ンジマ（Sam Nzima）が撮影した、ピーターソンの亡骸を抱えて走る学生の写真は南アフリカ国外でも広く報道され、国際社会に衝撃を与えた。

<http://www.sahistory.org.za/people/hector-pieterse>

子の帰還を待ち切れずに死んでしまったようです。

1970年代に入るとすぐに、反アパルトヘイト運動の当事者が来日するようになりました。アフリカ民族会議（African National Congress: ANC）の財務担当で詩人のマジシ・クネーネ（Mazisi Kunene）なんてすごい人が来て、僕らとの間にトラブルが生まれたりする。僕らも若かったんですね。日本に彼が来て、「解放闘争に必要な武器を買うから金つくってくれ」と言うので、あちこち労働組合に連れていったのだけれども、労働組合も政党も、アフリカの解放闘争はまだ遠い存在で、どこもお金など出さない。それで彼も怒ってしまって、”Japan is killing us. Japanese prosperity depends upon our blood” — 「日本は俺たちを殺しているんだ。俺たちの血はおまえらの繁栄を支えているんだ」 — という捨てぜりふを残して去っていく。僕らもうぶな若者ですから、相当なショックを受けて、「どうするんだよ、俺ら、殺しているんだよ？」という感じになった。

二つ目。アパルトヘイトというのは、国連がそれをcrime against humanity（人道に対する罪）と呼んだように、人間の権利の普遍的な価値への、当時としては最も非道な挑戦でした。今はまた別な問題が起こっていますが、アパルトヘイトは、「人権」という普遍的な価値への最大の挑戦、非道な挑戦であるというふうに、当時の世界は受けとめていた。国家が合法的に人権抑圧をやっていた、法律において黒人を非人間化していたわけですから、これは当然、crime against humanityなわけです。だからそういうことが起こっているのを知った以上、傍観や第三者的立場はあり得ないと思われた。また、「あなた方はどちら側に立つのか」と南アの人々も問うてきた。

後にデズモンド・ツツ（Desmond Tutu）さんが来日され、立教大学で講演されたのです。そのときも確か、「あなた方はどちら側に立っているのだ」と言ったはずです。僕も聞きに来たんです。つまり人権を抑圧する側か人権を守る側か。そのどちらかしかなく、君はどちらに立つのかと。

三つ目に、ますます醜くなっていく「名誉白人」、そして高度経済成長下の日本国家の「国益」と日本企業の「利権」の問題があります。そうした日本企業の名前がいっぱい書かれた資料が、立教に寄贈したアーカイブズの中にも入っています。どういう企業が南アで何をしていたのか。それを支えた政治家はだれなのか。このアーカイブズにはそうしたドキュメントも入っている。

「利権」を南ア黒人の「人権」よりも常に優先させてきた日本の政府と企業について、1987年になると世界の新聞は、「アパルトヘイトの最大のパートナー：日本」と報じたのです。ついに世界トップになった。そして、1988年12月の国連総会は日本の名指しで「非難」決議をし、

対南ア貿易の断絶を求めました<sup>4</sup>。どうしてトップになったかという、南アに駐在している日本企業は、黒人労働者の人権を守るためのルール、例えば賃金を黒人労働者が人間として生活できるような賃金以上にしようといった最低限の「倫理綱領」(code of conduct) さえも自社の黒人労働者には適用しなかった。アメリカやヨーロッパの企業はどこも倫理綱領を持っていたのに、なぜ日本企業にはないのか。僕は日産にもトヨタにも、数多くの商社にも抗議に行きました。

なぜないのかというと、理由は簡単です。南アに進出しているトヨタ・南アフリカは、「我々の工場ではありません」というのです。南アの工場はすべて現地法人化している。ですから、悪いのは南アの白人だということになる。

また、南アとの貿易でトップになったのですが、実際の取引額はもっと多いのです。しかし表に出る取引額は減らしたい。そのために第三国を経由するようになりました。スイス国籍の会社をつかって、その会社にものを売って、そこから日本に輸出しますから、その分はスイスとの取引額として計上されます。そういうことについてスイスは屁とも思わない国なので、日本の南アとの取引額は減るわけです。ウランの取引などはすべてこれでした。ここにも、関西電力に抗議に行った人がたくさんおられると思いますが、ナミビアのウランなどは、ほとんどがこの第三国経由で取引されていた。

僕は、まだ怒りがおさまらないんです。なぜおさまらないかというと、「どうして僕らの国は、いつも経済なんだ」と思うからです。なんでもかんでも、経済優先です。東電の原発事故でいまだに多くの人たちが苦しんでいるのに、インドに原発を売ろうとしている。経済優先です。ここでもお金優先です。このところをどうするかが、僕にとっては問題なんです。

4番目は、「二つのアパルトヘイト下の子どもたち」が出現したことです。僕は教育研究者なので、いつもこういう問題が気になってしまうのです。アパルトヘイト政策によって、家族も教育も奪われ、路上に投げ出されて先鋭化する黒人やカラードの子ども・若者たちのスローガンは、“Liberation first, education later”でした。「まず自由が先だ、教育は後からでいい」と言って、みんなで学校を壊していたのです。でも日本はといえば、Education first, liberation needless (まずは教育、解放はいらない) なのだ、これは本当にそう思った。デモをやっていたから、よくわかりました。南ア総領事館の前にあったのは、現在世田谷区長をされている保坂展人さんが、内申書裁判を争ったK中学校だったんです。

そのK中学校の前で、僕らはいつもデモをやり、ビラをまいていた。「南アの少年を救え」と。

---

<sup>4</sup> 例えば『読売新聞』1988年12月6日付。

でも、中学生の子たちは僕らのビラを受け取ってくれないんです。「あなたたちと同じ世代の子が殺されているんだよ。アパルトヘイトって知っているでしょう？」と聞くと、「習っています」なんて答えるのですが、受け取ってはくれない。「何で受け取らないの」と聞くと、「先生に怒られるからだ」と言う。

ちょうど僕の青年時代と同じ状況で、日本の企業や学校は、他者や世界を子どもや若者に教えることをしなくともいい。そういうことなんです。だから「二つのアパルトヘイト」だと僕は考えた。日本の子どもたちも、世界や社会や他者からアパルトヘイト（隔離）されている。南アフリカの子どもが解放されるのと、日本の子どもが自由になるのは、いっしょだと思ったのです。

5番目に「恐怖とフラストレーション」。これは黒人意識運動家で、僕らが招いたネングェクル（Ranwedzi Nengwekhulu）の言葉ですが、1960年代末から70年代にかけての南アの、「恐怖とフラストレーション」の中で広がった黒人意識運動の思想と実践に、私たちは非常に大きな衝撃を受けた。そこでは被差別者が主体的な人間になっていく。つまり被抑圧者がどうやって自由になるのか、という思想と実践を、黒人意識運動の若者たちが作り上げたのです。それは日本の部落解放運動とか日本の障害者運動において、一番どん底のところにいる人が、そこから始めて、どうやって闘う主体になっていくか、ということに通じている。まず「黒人」であることをひきうける、「被差別部落民」であることをひきうけるところから、解放と自由の闘いが始まる。

6番目になりますが、1980年代、南ア国内の反アパルトヘイト闘争が激化する中で、世界各地で反アパルトヘイト運動が広がっていったことがあります。そうなるともう後戻りできない。日本でもクリスチャンや仏教徒、人権団体、労働組合、反差別団体などに、反アパルトヘイト運動が広がっていった。それで中高生や主婦層、ミュージシャン、それから日本で暮らす外国人の方がたくさん入ってきて、様々なグループをつくりました。

今日も、大阪や名古屋、広島、北海道などからもそのときの仲間が来ていますが、日本のいろいろな都市に反アパルトヘイト市民団体が生まれて、共同行動をとるようになった。この会場にも、大阪、京都、東京、広島、熊本、名古屋や松戸のパンフレットなどが展示してあります。

そして、アジアの人権グループとの連携も始まったのはとても大事なことでした。1988年にアジアの人権グループを招いて、アフリカの反アパルトヘイト運動組織と一緒に「反アパルトヘイト・アジア・オセアニア・ワークショップ」をやりました。その年にはANCの日本事務所も

できて、南アからも要人がやってきました。

じつは、レジユメには書きませんでした。もう一つあります。僕はそのころ教師になっていましたから、「学校以外の世界を持っていないと、俺は教師としてだめになるな」と思っていました。これはなんでもそうだろうと思うのですが、僕らはみんな、飯を食っている仕事以外に何か抱えていないと、その仕事自体がだめになっていくのではないか。つまりどんな人も、ふつうの「市民」という窓口、つまり仕事とは違う、どこか別なところにも足を置いていないとだめになると思った。それが7番目の理由です。

### 3. 反アパルトヘイト運動のなかで考えたこと

最後に、第3のテーマとして反アパルトヘイト運動の中で考えたことについてです。

20代半ばから50代半ばまで、ほぼ30年間、反アパルトヘイト運動に、曲がりなりにもかかわり、南アフリカの人たちの深い悲しみや怒りや喜びとつながっていくことによって、日本で暮らす一人の人間として、市民として、親として、教師として、何とか生きてこられたような気がします。

僕はその中でパウロ・フレイレ (Paulo Freire) という人と出会って、翻訳までさせてもらうのですけれども<sup>5</sup>、パウロ・フレイレの言葉に (僕はポルトガル語ができなくて、英訳から訳したのですけれども) ”To be human is to engage in relationships with others and with the world” という言葉があります。これはどう訳してもいいのですけれども、「人間として生きるということは、他者や世界とかかわって生きることだ」ということです。他者や世界にかかわって生きないと人間になれないという、そうフレイレは言っていて、これだと思った。

2番目に、これも一つの気づきですけれども、世界は昔も今も悲しみに満ちている。個々の悲しみの比較はあまり意味がない。固有の悲しみのプライオリティ (優先性) は、主張できない。この点についてはANCとケンカになったことがあります。つまり、自分たちの、ある固有の悲しみのプライオリティだけで、国際会議はできないのです。私たちは、みずからの固有の悲しみを媒介にして、他者の悲しみや苦しみにつながろうとするのではないだろうか、と思うのです。日本の子どもたちの小さな悲しみがあるからこそ、アパルトヘイトの大きな悲しみにつながっていくことができる。そこに気がついたのです。

最後になりますが、マイケル・ラプスレーの『記憶の癒し』という本で取り上げられている

---

<sup>5</sup> パウロ・フレイレ著；小沢有作 [ほか] 訳『被抑圧者の教育学』(亜紀書房、1979年)。



問題があります。この本で彼が語っているのは、被害者、つまり被抑圧者の残酷な個人的・集合的な記憶が癒され、前を向いて生きる希望に変わっていくためには、加害者（抑圧者）の個人的・集合的な記憶が掘り起こされ、それと向き合うこと、つまり相互の記憶の共有が必要であるということです。そういう機会がなければ、加害者の個人的・集合的記憶（気づかれず潜在化していることが多い—それは日本と朝鮮の場合もそうですけど—）が癒され、人間の希望につながっていくことも不可能だと。

歴史健忘症、とりわけ加害健忘症は、被害当事者への二重の加害行為であり、歴史の逆転・風化です。このたび立教で受け入れてくださった「<記憶>のアーカイブズ」は、こういうものを阻止する重要な力となるだろうと思います。

最後に、僕の友人で、きょう来られなかった勝俣誠さんがはがきをくれたので、彼のメッセージだけを伝えておきたいと思います。

「世界にはまだまだ差別と弱き者、人々への抑圧があるので、皆さん、彼ら、彼女らと一緒に闘いましょう」。

ありがとうございました。

○司会（石井） 楠原さん、どうもありがとうございました。楠原さんがおっしゃってくださったことは、南アとの関係だけではなく、現在も様々な他者との関係において大いに当てはまることあると感じました。また質疑応答のときに、いろいろ伺わせていただければと思います。

では続きまして、次の登壇者、関西・南部アフリカネットワーク世話人の下垣桂二さんをお迎えしたいと思います。

下垣さんは、1970年から関西を中心とした反アパルトヘイト市民運動にかかわりまして、1990年、ネルソン・マンデラが来日したとき—あ那时的の高揚感は今も覚えていますけれども—には、西日本集会で事務局長を務められました。

「関西の反アパルトヘイト運動は反差別、人権のたたかいとともに」というタイトルでお話しいただきます。よろしく願いいたします。

## 下垣桂二さん講演

### 「関西の反アパルトヘイト運動は反差別、人権のたたかいとともに」

こんにちは。大阪から参りました下垣と申します。

実は、今日は、北は札幌から西は四国まで、昔の仲間がたくさん来てくださっていて、そういう方々がたくさんいらっしゃるなかで私がここでしゃべるといのもどうかと思うのです。本当は、僕じゃなくてもいいはずなのですが、たまたま僕は、各地で皆さんが出していた通信などの資料を捨てずに持っていたためにこうなったわけです。とはいえ、資料をこのたび立教大学共生社会研究センターで受け入れていただくということになり、たいへんうれしく思っています。

先ほど沼尻センター長から、「けっこうな量があるよ」とご紹介していただきましたが、確かにかなりの量だと思います。私の手元にありましたものはほとんどこちらに寄贈しました。それこそ手紙類とか、そういうものも全てです。ですから皆さん、ご自分がつくっておられたものがもう手元にないというようなことがあれば、こちらに来て探してみてください。残っている可能性が多分にあります。皆さんが発行した通信やミニコミなどは、こちらに収蔵されています。

私の手元と、それから楠原さんの手元にたくさん残っていたものを、こちらで引き受けていただいたわけですが、その火つけをしてくださったのが牧野さんです。僕はただずっと置いていただけ、段ボールに入れて置いていただけで、「そのうちに粗大ごみとして捨てることになるかな」なんて思っていたのですが、これを残すというか、ほかの方が見られるようにしたほうがいいんじゃないかという話が出てきて、立教大学共生社会研究センターで資料を預かっていたので、それで今日、話をさせていただくことになりました。非常に個人的なことを、限られた時間の中でお話しさせていただきます。

#### 1. 私が参加した反アパルトヘイト市民運動

昔から知っている人がたくさんいるものだから、「うそをつきにくいな」と思いつつ、個人的なことをお話しするわけですが、レジュメには「私が参加した反アパルトヘイト市民運動」ということで三つ挙げておきました。

まず「こむらどアフリカ委員会」。なつかしい名前です。1970年にスタートいたしました。こ

れも、僕自身忘れていたのですけれども、残っていた資料をひっくり返してみたら1970年で間違いないと確認できました。その資料も、こちらに入っています。

この委員会がいつまで続いたのか、レジュメには書いていません。というのも、「アフリカ行動委員会」は、うまく最後に「解散！」されたのですが、そういう手続を踏まなかったというか、そもそも手続もクソもないのです。市民運動的にやっていたので、組織の綱領があるわけでもないし、決議をすとかなんとかという話でもなく、結局のところ「こむらどアフリカ委員会」は、うやむやになっております。

これも調べてみたのですが、「こむらどアフリカ委員会」という名前を公に使った最後の機会は、発行していたミニコミ『こむらどニュース』の102号を91年5月に出しているのですが、このあたりではないかと思えます。このあたりで、おそらく「こむらどアフリカ委員会」という名前は使わなくなったのではないかなというふうに思えます。とはいえ、この時期で終わったということにするかどうか、まだ何人か当時の仲間がいますので、またそのうちに相談してみましよう。

それから、その「こむらどアフリカ委員会」に参加しながら、私は「反アパルトヘイト関西連絡会」というのにも関わってました。この連絡会は、1987年にアラン・ブサク (Allan Boesak) さんという南アフリカの牧師さんを迎える集会をしようという話があって、大阪でも集会をしてほしいということになり、実行委員会をつくったのですが、それが「反アパルトヘイト関西連絡会」です。私はそこで、市民運動をやっている人と、キリスト教会関係の人と一緒に準備をすることになりまして、その後ずっとこれが続いてきました。私も「反アパルトヘイト関西連絡会の下垣です」とかいうような形で、いろいろ呼びかけするというようなことになった。

先ほどの「こむらどアフリカ委員会」は、91年ぐらいで自然消滅したような感じになっておりますが、それ以降もずっと「反アパルトヘイト関西連絡会」には加わっております。ご存知のとおり、1994年に南アフリカでアパルトヘイトが制度的に終わり、一応総選挙が行われて民主化されます。そうなってみて、「アパルトヘイト」という言葉はちょっと使いにくいだろうな、でもそんな法律がなくなったからといって、すぐに昨日まで仕事がなかった人に仕事ができるわけでもないし、といった話をみんなでしたわけです。それで、名前を「関西・南部アフリカネットワーク」に変えて、いろいろな内容で活動できるようにして、現在に至っております。

そうそう、これを言い忘れるところであります。先ほど講演された楠原さんですけれども、楠原さんと出会ったのは、たぶん1970年代の初めのころだと思います。

## 2. 「南アの人種差別反対というけど、日本の部落差別はどうするんや」

1970年に「こむらどアフリカ委員会」ができるのですけれども、その後、東京でのデモに参加したりしたときに楠原さんと出会って、話をしているときに、楠原さんが私に、「下垣さん、あのね、10年やっpegらんよ。何か見えるものがあるから」というような話をされたんです。「十年一昔」という言い方が日本であります、最近はまだ十年一昔どころじゃないですね。感覚が随分変わってまいりました。それはさておき、10年やってみたら、見えるものがあるかもしれない、そう言われて……つまり、だまされたんです。「楠原さんにだまされた」という方は、今日も何人かお見えになっていると思います。教師なんていうのは、だいたい「人をだましてなんぼや」という側面があるのではないかと私は思っております。とにかく私もだまされて、いろいろアパルトヘイトだ、なんだかんだと言い出し始めるのですが、極めて早い段階で、非常に印象に残るできごとがありました。

「南アの人種差別反対とかって、おまえ、言うけどな、日本の部落差別どないすんねん」と言われたのです。私は今も大阪に住んでおりますし、当時もそうでありますけれども、とくに当時、1970年代の初めぐらいというのは、部落解放運動がだんだん盛り上がってくる時代であります。「そんな南アフリカの人種差別とかいうけど、部落差別どないすんねん」、あるいは在日朝鮮人・韓国人差別の問題などに日常的に取り組んでいる人が周囲にたくさんいるのです。そうすると、その人たちと話をすると、こう言われるわけです。

そう言われると「うーん」となる。1970年といえば、私は51年生まれなので、引き算いたしますと、「70-51=?」歳、つまり19歳なんです。私は高校を出てすぐ公務員になりました。少し前、たいへん浮き名を流しました大阪市の職員になったのです。さらにおまけで言いますと、僕は2年間、国民年金の仕事をしました。何年か前に「消えた年金問題」とかいうのがありまして、「うーん」と思いましたよ。その頃は全て手で集金して、誰からなんぼ集めたとかいう記録をつくっていた、コンピューターなどありません。そういう仕事をしておったので、「まあ、消えるかな」と思いました。が、これは余談であります。

何の話でしたか。そうそう、それで、とにかく、アパルトヘイトなどと言い出せば、「身近な差別、どないすんのや」という話になるわけなのです。それで「私たちはアパルトヘイトに反対し、“名誉白人”の称号を拒否する！」というようなスローガンを掲げてやることになったのですが、これはずいぶん後になってからの話です。何やかやたたかれる中で、結局、名誉白人のままでいるということは、日本がアパルトヘイトに加担しているということだと。加担して

いるということは、自分の問題、日本に住んでいる者の課題であろうということになり、そうであれば「遠い」とか「近い」とかという話じゃないだろう。「それは同じように考えなあかんことちゃうんかい？」ということで切り抜けるというか、何となくこちらとしては、部落差別、部落問題解消に取り組まないための免罪符じゃないのですけれども、自分たちはアパルトヘイト反対でたたかうぞ、というような感じになってきたのだらうと思います。

日本が加担していることについては、最初は「日本人の問題だ」と言っていましたけれども、途中から言い方が変わりました。「日本に住む者の問題だ」と。日本人の方だけが日本にいるわけじゃないですから。そういうことを学んでいく中で、だんだん固まっていったスローガンだったと思います。

それで、「出会い」の話になります。ここからだんだん、何気なく書いてしまったタイトル「関西の反アパ運動は、反差別、人権のたたかいとともに」に落とし込まないといけないので、話をそっちへ持っていきこうと思います。とにかく、いろいろな人との出会いがあって、一緒にやった。反アパ運動もやったけれども、ほかの運動もあって、その中に反アパの運動も一緒にやっていけるような関係がだんだんできていったという意味で、「反差別、人権のたたかいとともに」という言い方をしたのですけれども、なかでも二つの出会いについてお話ししたいと思います。

一つは部落解放運動との出会いです。先週、部落差別解消促進法<sup>6</sup>が成立いたしました。これはかつての地域改善対策特別措置法（1982年施行）のようなお金が絡んだ法律ではなく、理念法というか、部落差別が存在するということをまず認めて、現実はまだ日本には部落差別があるということを法律的に明らかにしたものだと思います。こんな法律ができたからといって、世の中すぐ変わるわけでもないのですが、これができたということは、やはり大きな意味があるだろうと私は思います。

実は、今日の公開講演会のチラシに、1枚だけ写真が使われています。ネルソン・マンデラを撮ったものですが、これはおそらく紀野鉄男さんという方の写真だと思います。紀野さんは解放新聞社で仕事をされていた方で、私が大阪市に就職したときに、高校の担任が紹介してくれた方なんですけれども、この方を通じて、部落解放運動の人たちとの出会いが広がってまいります。

そうしたつながりは一日二日でできたわけではありません。でも、だんだんとできてくる中で、例えば1990年にネルソン・マンデラを迎えて、東京と大阪で歓迎集会が行われましたが、

---

<sup>6</sup>部落差別の解消の推進に関する法律、2016年12月9日成立。

このときに大阪では2万8,000人集まったと、公式には言っています。

これはじつは誰も数えてなくて、よくある話ですが、主催者発表何万人、警察発表その半分ぐらいということなのです。会場にした扇町プール—もう今はありませんが—が全部埋まると3万人入るという話だったんです。設定した舞台からばあっと見たところ、少し空席がありましたから、「これはまあ2万8,000ぐらいにしようか」ということになったのです。そう言ったのは、私と部落解放同盟の幹部で、一緒にこの集会を準備していた人なんですけれども、「なんぼにしようか」「うん、じゃ、2万8,000にしよう」とかいって（笑）、いい加減な話ですが、でもかなりの方が集まってくださったということは間違いないことです。そういうふうには、様々な出会いがあってマンデラ歓迎集会につながっていったと思います。

二つ目に、「人権問題に取り組むキリスト教関係者との出会い」と書きました。これは1987年のことです。アラン・ブサク牧師を迎える集会を準備するために、大阪で初めて出会ったのです。当時、いろいろな教会の方がお見えになっておりました。

その少し前から、キリスト教の関係者の間で「外国人登録法問題に取り組むキリスト教連絡協議会」（「外キ連」）が動き出していました。そこに参加されておられる方が、このアラン・ブサクさんの集会の準備にも加わってくださったということです。

このときに、木川田一郎さんという方と出会いました。当時、日本聖公会の大阪の主教をなさっていた方です。その後、日本聖公会のトップである首座主教も務められ、残念なことに去年お亡くなりになりました。

このブサク師をお迎えする集会の実行委員会が、「反アパルトヘイト関西連絡会」になるわけですが、その会の代表を木川田さんに引き受けていただきました。ただ、これもきっちり組織的な綱領をつくったとか、約束事を文書にしたとか、そういう集まりでは全然ないのです。何人かでいろいろな集会とか、いろいろな取り組みを進めていくのですけれども、そういうときにやはり代表者は必要だろうというので、木川田主教にお願いした。そしてその後もずっと引き受けていただきまして、ネルソン・マンデラを招くときの集会の代表も木川田主教にさせていただきました。

マンデラのときは、東京のほうで「そりゃ、日本委員会というのをつくらにゃあかんで」という話になって、今日お見えになっている吉田昌夫さんに東京の日本委員会の事務局長をしていただき、大阪は私がさせていただくことになります。

ただ、キリスト教会の皆さんと出会う前は、僕はわりと批判的なことを言っていたんです。

皆さん、「カイロス文書」についてご記憶があると思いますが、1985年9月に、南アフリカの

キリスト者の人たち153名が、アパルトヘイトを批判する文書に署名した。それを「カイロス文書」というのですが、そういう話を断片的に東京経由で聞いていたわけです。それで僕も、「日本のキリスト教関係の人も、アパルトヘイトで何か動いてくれはったらええのにな」とか、ちょっと悪口風に言ったりしていたのです。

ところが、キリスト教関係者の方に出会ってみると、とくに大阪の場合は1987年以降、木川田主教だけではなく、やはり日本聖公会の司祭で原田〔光雄〕さんという方が、現在の関西・南部アフリカネットワークの代表者ですが、こうした方々が動いてくださった。やはり物事というのは、知ってはいても、それに対して動くにはきっかけが必要なんだなど。もちろん日本のクリスチャンの方が、アパルトヘイトのことを知らなかったわけではないのですが、具体的に行動を起こすとなると何かきっかけが必要だった。そういうところで、市民運動といいますか、私や何人かの人が出かけて行ってやいやい言うということも、一つの刺激というか、きっかけになったのだらうと、今になって思います。

これがその後の反アパルトヘイト運動を進めていく上で、非常に大きな力になってくるわけです。例えば僕らは会費も取ってないし、組織もちゃんとしていない。銭もない、来る者は拒まず、去る者は追わずみたいなことをやっていますから、すごく脆弱なんです。そういう活動をしていていちばん困るのが、何かで集まろうというときに、「どこの部屋、使う？」「会場、どないすんねん？」ということなのですが、その点ではずいぶん甘えさせてもらいました。

例えばYMCAというところがありますね。僕はYMCAというのは、中学生とか高校生の頃は、予備校のことだと思っていたのです。じつは予備校ではなかったのですけれども、そのYMCAの部屋を、集まりをするときにただで貸していただいた。そういうことにつながっていくのです。これはYMCAが、「そういう運動には取り組まなあかん」と考え、その一環として「そういう目的なら提供しましょう」という、かっこうよく言えばまあそうなる。実際そうかどうかはともかくとして、そういうふうに使わせていただくことができて、ずいぶん助かりました。

### **3. やめたいけど、やめられない**

そして3番目が、「やめたいけど、やめられない」ということです。これが素直な気持ちですね。やめたいけど、やめられない。今日も名古屋からお二人お見えになっていますけれども、名古屋のみなさんはまだ「アパルトヘイト」という言葉を使っているのです。「アパルトヘイトを考える市民の会・名古屋」。これはまだ生きています。ですから、またそのうちに、そう

いう名前で集まりや取り組みが行われるのではないかと思います。

大阪の場合は、「アパルトヘイト」という言葉は外しましたが、それでも「やめたいけど、やめられない」という感じなのです。なぜか。その理由を二つほど挙げてみます。まず一つ目は、「よみがえるアパルトヘイトの『亡霊』」とレジュメには書いたのですが、曾野綾子さんの件です<sup>7</sup>。じつは「よみがえる」ではなくて、曾野綾子さんは確信犯で、昔からこの種のことをおっしゃっているのですが、たまたま昨年2月の産経新聞にコラムが掲載された。私たちの代表の原田さんが、これを「産経新聞・曾野綾子事件」と呼ぼうと言っていますが、この問題は真剣に考えなければならないと思います。

曾野さんは、決してアパルトヘイトを導入しようと言っているわけではない、とおっしゃってますが、この文章を読むと、どう考えてもそう読める。許せない話です。でも、こういうことは今後もいろいろな形で出てくるだろうと思います。

そういうときにやはり、「これ、反撃せなあかん」ということになるわけです。私個人でとか、あるいは「関西・南部アフリカネットワーク」でとか、しかも「せなあかん」とか「したらええ」という問題ではなくて、ただ素直にずっと動いてしまう。なにせ40年以上やってきているものですから、そういうふうになってしまうのです。やめたいんだけど、せざるを得ないというような状況が、やはり今もあるのだと思います。

もう一つは、大阪人権博物館（リバティおおさか）つぶしを阻止しよう、ということです。これは、ご存じの方もいらっしゃるかもしれません。リバティおおさかは、かつて反アパの展示などもしたことがあって、一緒にいろいろやってきたところなんです。去年は、ネルソン・マンデラさんが亡くなりはったということで、ここでもう一度展示をやろうということになり、やったのですが、そのリバティおおさかがつぶされようとしています。

簡単にいいますと、橋下徹さんが大阪府知事になって（それから大阪市長になりましたが）、「こんな施設はあかん、非常に暗い」、「若者に、若い人たちに夢を与えるような内容になつたらへん」とかなんとか、いちゃもんをつけ始めた。実は、リバティおおさかの建っている土地は大阪市の土地で、上の建物は、リバティおおさかの所有物になっている。それで、今までは、人権問題に取り組んでいるということで補助金も出してきた。そもそも設立のときにも大阪府や大阪市がずいぶんお金や人も出している。そうやって立ち上げた館なんです。もともとは部落解放運動の大きな流れの中でできたわけですが、いろいろな人権問題の展示に取り組んでい

---

<sup>7</sup> 産経新聞 2015年2月11日掲載、「曾野綾子の透明な歳月の光」（第629回）『労働力不足と移民—「適度な距離」保ち受け入れを』



る施設です。それを「こんなの暗い」とか橋下さんが言い出して、補助金を打ち切った。それでもなんとかやっていたのですが、そのうちに今度は「地代、土地代を払え」とくる。ところが払えないんです。リバティおおさかのような博物館が儲かるわけありませんから。儲からないので、払えない。そうすると「出ていけ」というので、今、裁判になっています。

言ってみれば借地の上に家建てて住んでいるけれども地代を払えへん。払えへんやったら出て行って、家壊して出て行ってという、単純な民事裁判なのですが、これがずっと続いている。担当している弁護士さんの話では、「こんなもの、何べんも審議するような話じゃなくて、もう本当に二、三回、ちゃちゃっとやりとりしたらすぐ判決が出るような内容なんや」と。

ところが、それでは大変なことになるので、がんばって公判にどんどん動員しようということで、私もほとんどの公判に出ています。大阪地方裁判所の一番広い法廷、100人ちょっとぐらい入るところで開かれています。それでも傍聴は抽選です。抽選になるぐらいの人数が毎回集まって、傍聴して、「そう単純じゃないよ、いろいろいきさつがあんねんから」というようなことを弁護側としては延々と主張しているわけです。

これは、橋下さんの思いつきでリバティおおさかをつぶすという、それだけの問題じゃない。いわゆる人権侵害や差別に反対する運動、あるいはそれについて伝えるものを、世の中から消していこうとする日本全体の流れの中にある。そんなふうには、みんなで話しています。

大阪にはもう一つ、ピースおおさかという施設があります。ここも展示の内容を変える、変えないで相当すったもんだして、これも橋下さん、あるいは松井一郎さんという今の大阪府知事が絡んでいるのですが、結局は展示の内容を変えさせてしまうというようなことがありました。こうした大きな流れがあって、それは全国各地にあるのではないかと思います。とりわけ私の場合は、リバティおおさかは大阪でずっと一緒にやってきたわけです。館長は朝治（武）さんという方で、リバティおおさかを立ち上げる時から私も知っている方なので、ぜひ一緒に応援しようということなのです。

最後は、単純な民事裁判ですから、おそらく立ち退きなさいという判決が出るだろうと、みんな思っているわけです。そのときは、座り込んででも阻止しようという話をしています。私は、座り込むぐらいしかできることがないから、一緒にやろう、と話しているのですが、強制立ち退きを求めているところに座り込んでいると、ごぼう抜きに遭うかもしれませんね。沖縄での弾圧と同じように、「こら、土人」とかって言われるかもしれませんね。そうであっても、私は座り込んででも阻止せないかんと思っています。

皆さん、ぜひリバティおおさかの現状について、大阪の単なるローカルな話と思わずに、注

目していただければと思います。

それで、最後に一各地からたくさんの方がお見えになっていますから、後でいろいろ発言していただければいいと思うのですけれども一私の非常に個人的な思いですが、反アパルトヘイト運動に自分が参加してきてよかったなと思うのは、アパルトヘイトが打倒されたということです。やはり人がつくったものは、人がつぶせる。それを目撃できたことです。

もちろん、南アフリカが今、すばらしい虹の国になりつつあるかということ、それはまた別の話です。差別の法律がなくなったからといって、すぐ問題が解決しないというのは、日本でもそうで、部落問題でいえば、明治時代に太政官布告でしたか、ができました。日本では法律で身分差別しているわけではない。ないけれども、部落差別は存在している。先ほどの差別解消法のようなものが作られる必要がある、ということとも関係すると思うのですが、それでも、そう簡単に、差別の実態がなくなるわけではありません。

昔、みんなで話をしていましたよね、「僕らが生きている間にアパルトヘイトが...」と。もちろんなくなってほしいのだけれども、でも「まあ、なあ...」とか言いながら、ぼちぼちやっていた。先ほど楠原さんが、「わりといい加減にやってきたから続いてきた」とおっしゃいましたが、私もそうだと思います。大阪風に言えば「もうかりまっか」「ぼちぼちでんな」という、それぐらいの感覚で、ずっと反アパルトヘイト運動というのを呼びかけてきまして、現在に至っているので、「やめたいけど、まだやめられへんな」と思う。

こういう看板を上げておきますと、非常に便利でもあるのです。例えば曾野綾子さんの発言に抗議するというとき、「下垣桂二が」ということでやってもいいのですが、なんとなくそれでは広がり欠ける。それよりも「関西・南部アフリカネットワーク」という名前で抗議の意思を表示するというほうが、より広がりを持たせることができるのではないかと、私は思います。ですから、これからは続けてまいりたいと思っています。

どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

○司会（石井） 大変臨場感あふれるお話、ありがとうございました。

本当に今、人種差別的な発言が声を大きくしている今日この頃ですので、ぜひ続けていただきたいと思いました。

続きまして、JETROアジア経済研究所研究員／アフリカ日本協議会理事を務めていらっしやいます牧野久美子さんをお迎えしたいと思います。

牧野さんは南アフリカの政治経済、とくに公共政策形成における市民社会組織や社会運動の

役割をご研究されています。今回、反アパルトヘイトの市民活動の資料が、共生社会研究センターのほうに寄贈されるきっかけもつくっていただきました。ご講演のタイトルは、「反アパルトヘイト運動は世界でどう記録／記憶されてきたか」です。

それではよろしくお願いします。

## 牧野久美子さん講演

### 「反アパルトヘイト運動は世界でどう記録／記憶されてきたか」

ただいまご紹介にあずかりましたアジア経済研究所研究員の牧野と申します。アフリカ日本協議会理事もしております。

お二人の話に、私からつけ加えるべきことなど、ほとんどないのですけれども、最初に沼尻先生からもご紹介がありましたように、今回、この講演会が企画されたのは、日本の反アパルトヘイトの市民運動の資料が立教大学共生社会研究センターに寄贈されたことがきっかけとなっております。ですので、そもそも何でこういう資料を寄贈しよう、そうしたほうがよいという話になったのか、その背景を少し知っていただくという趣旨で、日本以外の海外で、反アパルトヘイトの記録や記憶がどのように残されているのか、どのように扱われているのかということについて、少しお話しさせていただきたいと思います。

#### 1. 南アフリカの解放と国際連帯

まず、南アフリカの解放と国際連帯について、かつて南アフリカでアパルトヘイト体制というものがあつた中で、それに対する闘いが起きたわけですが、その反アパルトヘイトの闘いというのは、南アフリカの国内だけで行われていたものではなくて、国際的なものであつた、国際社会を舞台としたものであつたということ、少し背景としてお話ししたいと思います。

南アフリカでは1960年にシャープビル事件というのがありました。時間の関係で詳しくお話しできませんが、パス法というアパルトヘイトの法律に反対して集まっていた人たちに、警官が発砲して、多数の人が亡くなった。それをきっかけにして、南アフリカの人びとのあいだに抵抗が広がるなかで、アパルトヘイトに反対するANC、それからパンアフリカニスト会議（Pan

Africanist Congress: PAC) といった組織が非合法化される。南アフリカの国内で合法的に活動することができなくなるということがありました。その後、それらの組織で活動していた活動家の多くは、逮捕・投獄され、あるいは亡命して、国外に拠点を移していく。1990年に合法化されるまで、60年からの30年間、ずっとその状況が続いたわけです。

その間、多くの解放運動組織が国外に拠点を持って、そこからアパルトヘイト体制の南アフリカを解放するための闘いを闘った。そこに国際連帯の余地が生まれる。つまり南アフリカの解放運動の人たちが主役ではあるのだけれども、彼らが闘いを続けるために、また南アフリカの白人政権を国際社会から孤立させていく、その包囲網を世界全体でつくっていくために、国際連帯というものが、反アパルトヘイト運動の中で一つの重要な要素となった。

亡命生活というのは、すごく大変なことなんです。単純に一方向の移民とは違って、出ていった先で定着して、安住することが目的ではない。いつか祖国を解放して、そこに帰るという前提で、でもそれまでの間、亡命した先で生活を続けなければいけない。そして運動も続けなければいけない。そうした亡命者の活動を支えてきたのは、まさに国際連帯の役割であったわけです。

亡命解放運動への支援のあり方として、「アパルトヘイトには反対です」「あなたたちが言っていることを支持します」「その支持を広げるために自分たちもかかわっていきます」という、政治的な支援が大前提ですけれども、それだけではない。さきほど、ANCのマジシ・クネーネがファンドレイズを目的として日本に来たが、なかなかそれに応えられない日本社会というのが、日本の運動としてはとてもつらい経験だったというお話がありましたけれども、ファンドレイズ、お金というのは、亡命していた解放運動がサバイブしていくためには非常に重要なことだった。例えば事務所があれば、事務所を維持していく。土地、建物、いろいろな維持費。それから、そこに生活している人たち一活動家自身、そしてまた家族の生活を支えていくといったところも含めた物質的な支援。さらに、軍事的な支援。ANCがソ連から多大な軍事的な支援を受けていたことは有名ですけれども、そうした軍事的な支援なども含めて、いろいろな形で南アフリカ国外から、解放運動に対する支援があったわけです。

その中で南アフリカ白人政権の孤立化を図っていく。アパルトヘイトはいけないのだ、人種差別は許されないのだという、反人種主義の国際規範をつくっていく。こうした国際規範は、世界のいろいろなところで、トランスナショナルな反アパルトヘイトのネットワークの中でつくられていった。

そうすると例えば、オーディー・クロッツ (Audie Klotz) という人の有名な研究のなかで指

摘されているように<sup>8</sup>、国際規範が変われば国益の定義も変化する。アメリカは、また日本も含め、だいたい西側諸国はそうでしたけれども、ずっとアパルトヘイトはいけない、いけないと、一応口では言いつつ、経済制裁には消極的だった。

でもそれが、国際規範が変わることで、つまりアパルトヘイトというのは許されない、人種主義というのは許されないという国際規範が確立する中で、それを無視して、静観していることが国益にかなわなくなってくる。国益自体が、規範が変わることで変わっていく。それによって、たとえばアメリカなども制裁に乗り出していく。そういうところで、解放運動に対する支援、そして国際連帯の役わりというのがあったわけです。

今回、立教大学に寄贈された資料というのは、日本の市民の反アパルトヘイト運動のものなのですが、世界的に見たときには、国際連帯の主体というのは必ずしも市民ではなく、国家である場合もあるわけです。植民地から独立したアフリカ諸国は、政府が解放運動に対して直接支援したし、また社会主義国もやはり政府が支援した。また、国際機関、たとえば国連や、アフリカ統一機構 (Organization of African Unity: OAU) の支援も重要だった。西側諸国は、ほとんどの場合、政府はアパルトヘイト体制に対して融和的だったのだけれども、市民がそれに対して声を上げる。日本もそのパターンです。ただ、西側に一応属しながらも、北欧諸国の場合は、市民も運動するし、そして政府も直接解放運動を支援するということで、非常に多様な主体が国際連帯という全体にかかわってきたということがあります。

反アパルトヘイト国際連帯については、近年、いろいろな研究やドキュメンタリーが出てきています。その中の一つに、South African Democracy Education Trustというところが出している「南アフリカにおける民主主義への道 (Road to Democracy in South Africa)」という出版物のシリーズがあります。これは南アフリカの解放運動の歩みをまとめた、何巻もある書物なのですが、その中で国際連帯 (International Solidarity) と銘打たれているものが2冊、それからアフリカ連帯 (African Solidarity) というのが2冊、これまでに出版されています<sup>9</sup>。

そのうちの国際連帯の巻は、2008年に出ているのですが、その目次をみると、最初に国連についての章があり、それからイギリスに本部のあったInternational Defence and Aid

---

<sup>8</sup> Klotz, Audie. *Norms in international relations: The struggle against apartheid*. Ithaca and London: Cornell University Press, 1999.

<sup>9</sup> SADET (South African Democracy Education Trust). *The Road to Democracy in South Africa, Volume 3, International Solidarity*. Pretoria: UNISA Press, 2008; SADET. *The Road to Democracy in South Africa, Volume 5, African Solidarity*. Pretoria: UNISA Press, 2013.

Fund (IDAF) という、もともとは南アの政治囚を支援するためにつくられた基金で、ここから発信された情報が、日本の市民運動も含めて、世界中の反アパルトヘイト運動で活用されたという、そのような団体についての章があります。その他、いろいろな国の反アパルトヘイト国際連帯運動のことが書かれているわけなのですが、日本のことは全然入っていないのです。ヨーロッパのほとんどの主要国が入っていて、アメリカ、カナダ、それからオーストラリア、ニュージーランド、それからアジアだと、インド、中国が入っているのですが、日本の章はなかったのです。これを見て、私は大きな衝撃を受けました。そのことが、私にとって、今日のこの会につながる一番大もとの部分にあります。

私自身は、ちょうど世代的に、あるいは意識が低かったということでもあるでしょうが、反アパルトヘイト運動に直接かかわっていない、乗り遅れた世代です。それでも、学生のときに南アフリカに曲がりなりにも関心を持って、大学院で南アフリカのことを勉強しようというふうになったのは、当時は英語もろくに読めないというときに、日本語で手に入る南アフリカに関する情報が、かなりあったということが大きかった。私がたぶん高校3年生のときだったと思うのですが、地元の町田市で「アパルトヘイト否（ノン）！国際美術展」があって、なんで行ったのかは覚えていないのですが、とにかくそれに行っているんです。それから、おそらく「アシナマリ」だと思うのですが、南アフリカから来た反アパルトヘイトのメッセージを込めたミュージカルも見に行きました。当時の私にとっては、単に「美術展があるから行こう」「演劇があるから行こう」「本があるから読もう」という感じだったのですが、そのときは、南アフリカについての本がこんなに何冊も何冊も出ていること、あるいは美術展が来ること、演劇が来ることについて、それを実現させるために、一体どれだけの人が、実行委員会とかいろいろつくって動いていたのか、そういう反アパルトヘイトにかかわっていた人たちの存在というのが、10代の学生の私には全く見えていませんでした。

でも、あとあと、南アフリカのことを勉強するようになって、南アフリカに1997年に初めて行ったのですが、そのとき、きょう見えている津山直子さん<sup>10</sup>に、いろいろ案内していただいて、本当にお世話になりました。津山さん以外にも、南アフリカで私をいろいろなところに連れていってくださる、いろいろな人につないでくださる方々、その全員ではないけれども、かなりの人たちが、実は、反アパルトヘイトにかかわって、そのまま南アフリカにかかわり続

---

<sup>10</sup> アフリカ日本協議会 (AJF) 代表理事、関西大学客員教授。スウェーデン留学中に反アパルトヘイト運動に参加し、帰国後 1988～1991 年に ANC 東京事務所に勤務。その後、日本国際ボランティアセンター (JVC) スタッフとなり、1994～2009 年南アフリカ現地代表として、現地の市民社会組織と協力して草の根の支援活動を行っていた。

けた人たちだった。そういう人たちに会う中で、私自身も南アフリカとかかわりを深めていったということがあります。

だから、私は自分では反アパルトヘイト運動をやっていなかったのだけれども、そういうことをやっていた人たちがいたからこそ、今、私がこういうことをやれているのだという思いがありました。ですので、このSADETの本を見て、「あ、日本のことが、全然書かれていない、ちょっとこれは」というショックがすごく大きかった。これが一番大もとのところにあたりします。

SADETのほかにも、いろいろ研究が出ていますが、そこには明らかにバイアスがあります。というのは、反アパルトヘイト国際連帯について書かれているものの多くが、欧米に偏っている。せいぜいオーストラリア、ニュージーランド—それはたぶん、後で出てくるミシガン州立大学のサイトにもかかわっている方が、その地域を研究されているからなのかなと<sup>11</sup>。あと、アフリカ諸国は、またそれとは別の、アフリカ現代政治史の文脈で、亡命者をたくさん受け入れていましたから、プレ解放時代のANC in exileのアフリカでの生活といったところについては、それなりに研究があるわけです。

でも、日本を含めて、アジアに関しては非常に情報が少ない、書かれているものが少ないということがあります。インドはちょっと例外なんですけれども。それはガンディー以来の南アフリカとインドの関係というのがありますので。

*Radical History Review*という雑誌で、2014年にGlobal Anti-Apartheidについての特集号があったのですが、そこでもそういう欧米中心のバイアスがあることが指摘されていました<sup>12</sup>。この特集号では、南米のブラジルだとか、あまりほかで出てこないような話も出てくる。でも、そこにも日本の話はありませんでした。

ですので、いろいろな形で反アパルトヘイト国際連帯について、今、どんどん記録が書かれている、出版されている状況で、日本のこともちゃんと残す、発信していく必要があるなというのが、このプロジェクトをそもそも始めた大きなきっかけになっています。

---

<sup>11</sup> African Activist Archive のプロジェクト・メンバーの一人である Peter Limb がオーストラリア、ニュージーランドの反アパルトヘイト運動について SADET (2008) に寄稿している。

<sup>12</sup> Lisa Brock et al. "The Global Antiapartheid Movement, 1946-1994: Editor's Introduction." *Radical History Review* 119 (2014): 1-5.

## 2. 南アフリカにおける反アパルトヘイト運動資料アーカイブズ

次に、海外の運動アーカイブズの状況について、いくつか御紹介したいと思います。

まず、南アフリカでは、フォートヘア（Fort Hare）大学という、南アフリカの黒人大学として非常に由緒ある、マンデラさんが通っていたことでも有名な大学にあるものが、解放運動のメイン・アーカイブズといえます（Liberation Movement Archives）。今の与党であるANC、それからPAC、黒人意識運動などのアーカイブズを、大学が所有するというのではなく、カストディアン（custodian, 管理人）という言い方をしていますけれども、そういう形で大学が管理する。けれども、あくまでも持っている主体は解放運動ですよという形で、ANCやPAC、黒人意識運動の資料がこちらにあります。

もう一つは、ケープタウンにあるウエスタンケープ大学（University of Western Cape: UWC）に、マイブイエ・アーカイブズ（Mayibuye Archives）というのがあります。どちらかというと、南アフリカ国内の解放運動のアーカイブズは、さきほどのフォートヘアのほうにあって、こちらには、海外の反アパルトヘイト運動から送られてきた資料がたくさんあります。イギリスから来たもの、あとオランダの資料などもたくさんある。日本の反アパルトヘイトにかかわってこられた方からも、マイブイエ・アーカイブズのあるマイブイエ・センターに日本の資料も送ったはずだから、そこにあるはずだというふうに、何人かの方から聞きました。けれども、実は、ここに私が行っても、日本の資料はほとんど見つからなかったのです。

どこに行ったのかは、いまだになぞなんです。ただ、さきほど申し上げたフォートヘアのほうには、解放運動自体の資料が入っている。その中には、ANCの話でいいますと、ANCが海外に置いていた事務所の資料が入っているんです。そういう形で、日本の、東京にあったANC事務所の資料もフォートヘアにありました。それによって、間接的にですけれども、少なくともANCから見えていた日本の反アパルトヘイト運動については、ここである程度、見ることができる。ただし、UWCのほうに送ったはずの資料は、本当にどこに行ってしまったのだろうということがあって、私も、もう1回ちゃんと探索しないといけないなと思っています。少なくともマイブイエ・センターのカタログにはなくて、係の人に聞いても「日本のあったかな、うーん」という感じで。ANC東京事務所のパンフレット2冊だけは入っているのですけれども、それ以上のものがないという状況です。

フォートヘアのアーカイブズも、UWCのマイブイエ・アーカイブズも、ちゃんとしたウェブサイトなどない。ただ、ここにアーカイブがありますよという情報自体はいろいろなところに出



ている。行ってみないとわからないということで、とくにフォートヘアは、かなり大都市圏からは遠いところにあるので、不便といえば不便なのですけれども、でも行ってみると、ちゃんと資料はあるし、アーキビストの人たちもいて、非常に協力的にいろいろ見せてくれるという状況がありました。

そのほかには、ネルソン・マンデラ財団のウェブサイトのなかに、Anti-Apartheid Movement Archivesというのがあって、これは資料そのものを載せているのではなくて、反アパルトヘイトにかかわるいろいろなアーカイブズのリスト、どこにどんな団体のアーカイブズ、資料があるのかのリストがあります<sup>13</sup>。日本に関しては、一つは、反差別国際運動（IMADR）一部落解放同盟と近い関係にある国際NGOですーがリストに上がっているのと、あと、日本反アパルトヘイト委員会についても、私がここを訪ねたときに、こういう資料を集めていることを伝えたので、一応、リストに載せてもらっています。ただ、いまは私の名前で、アジ研にあるということになっているので、これを機に、立教大学に書きかえる必要がありますね。

ほかにも、いろいろオンラインの情報はあるのですが、南アフリカ国内のメインのアーカイブズというのは、さきほど言ったフォートヘアとマイブイエ・センターの二つになります。

### 3. 欧米の反アパルトヘイト運動のデジタル・アーカイブズ

もうあまり時間もないので、駆け足で、欧米のドキュメンテーション・プロジェクトのデジタル・アーカイブズについてお話しします。先ほど言いましたように、南ア国内の解放運動の一次資料というのは、あるにはあって、とくにフォートヘアには、かなり豊かな資料があるのだけれども、とにかく行ってみないとわからない、物理的にそこに行かなきゃ見られないというタイプのアーカイブズなのですけれども、欧米の反アパルトヘイト運動に関しては、かなりデジタル化が進んでいます。イギリスでは、Anti-Apartheid Movement（AAM）のデジタル・アーカイブズが、たしか二、三年ぐらい前かと思いますが、わりと最近できました<sup>14</sup>。大もとのアーカイブズ、もとになっている紙の資料は、オックスフォード大のBodleian Libraryというところにあるそうです。このデジタル・アーカイブズには、さまざまなドキュメント、動画、インタビューのテキスト、運動の歴史をまとめた文章などが収められています。これは目指す

---

<sup>13</sup> <https://www.nelsonmandela.org/images/uploads/aama-azlist.pdf>

<sup>14</sup> <http://www.aamarchives.org/>

べき、本当の理想というか、こういうのが日本でもできたらいいなと思いつつも、これは、かなりお金と人がかかっていると思われまふ。ウェブサイトの下のほうにずらずらと、ファンダーが書かれていまして、個人でできるレベルの話ではないんですけども、イギリスはさすがにというか、こういうをつくっているという感じだす。

それから北欧諸国については、Nordic Documentation on the Liberation Struggle in Southern Africaというウェブサイトがあります<sup>15</sup>。スウェーデンのウプサラにあるNordic Africa Instituteが、1994年の南アフリカ解放直後から、北欧諸国（スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、デンマーク、アイスランド）が南部アフリカ、つまり南アフリカだけでなく、ナミビアやモザンビークとかも含めてですけども、南部アフリカ諸国の解放にどうかかわったかについてのドキュメンテーションのプロジェクトをやりました。これはかなり大がかりなもので、またこの種のものとしては、最も早くおこなわれたものです。

2015年に津山さんと一緒にスウェーデンに現地調査に行って、このプロジェクトの担当者だった方ともお話ししたんですけども、これは、ある意味国家的なプロジェクトで、国がお金をつけて大々的にやったし、内部的な文書も含めて全部アクセスして、ドキュメンテーションをおこなった。ウェブサイトのほかに、分厚い本も何冊も出しているというものです。

一つ注意しなければいけないのは、知らずにこれを読むと、スウェーデンでは市民と政府がともに手と手を携えて、南部アフリカの人たちを支援したのだなというふうに読めるんですけども、市民運動としてかかわってきた人から見ると、このプロジェクトは、政府の立場から支援にかかわってきた方がやられたものだったので、やはり違う見方がある。市民運動としてかかわってきた人たちから見ると、市民が主体ではなくて、政府がとてもイニシアチブをとったように書かれていて、かなりバイアスがあるように見えるものでもあったようです。

さらに言うと、民主化直後に、何でこういうことを国家的なプロジェクトとして北欧諸国がやったのかという、うがった考え方をすると、その後の新しい南アフリカとの関係をつくっていく上での、ある意味資源になるわけですね。私たちは解放運動をこんなに支援したよ、というのは、もちろんそれだけという意味ではないけれども。

スウェーデンで市民運動をやっている方からはこういう話を聞きました。アパルトヘイト後の南アフリカの非常に大きなスキャンダルに、軍備調達契約（Arms Deal）をめぐるものがあります。南アフリカ軍のために、国際的な企業から、武器やいろいろな軍備を調達するときに賄賂が飛び交った、大規模な汚職事件があったんですけども、それにスウェーデンの企業がか

---

<sup>15</sup> <http://www.liberationafrica.se/>

かわっているんです。それに関して、南アフリカ政府にスウェーデン企業と契約を結ぶように、スウェーデン側から働きかけをする際に、解放運動を支援した実績を見せて、こんなに支援したのだから、契約取らせてよというような裏取引があったのではないかと。これは完全に実証されているわけではないのですけれども、そういうことを言っている方々もいるということです<sup>16</sup>。ですので、ドキュメンテーションについて、ちゃんとやられていて、すばらしいな、というだけではなくて、何のためにこれをやっているかということに、気をつけなければいけない場合もあるかもしれません。

最後に、アメリカでは、African Activist Archiveというものがあります。これはミシガン州立大学などが整備にかなり関わっています<sup>17</sup>。また、Alukaというプロジェクトで、Struggles for Freedom: Southern Africaというサイトがあります<sup>18</sup>。これは、反アパルトヘイトに限らず、南部アフリカの解放にかかわるさまざまな資料をデジタル化したものを置いているのですけれども、実は、さきほど述べたフォートヘアにあるような資料も、全部デジタル化して、ここに載せるという構想がありました。それが頓挫した結果として、今、フォートヘアのものは、全然ネット上では見えなくて、行ってみないと見られないという状況になっています。

そのときにどういう議論があったかという、デジタル帝国主義批判のようなものが起きた。つまり、アフリカの人々の歴史にかかわる資料を、北の国々がデジタル化して、そして彼らがデータを持ち、あるいは知的財産権もかかわってくるというような、そういうことに対するアフリカ側からの反発があって、頓挫したというのです<sup>19</sup>。もちろん記録は残したほうがいい。そしてデジタル化すれば、いろいろな人がアクセスしやすくなるということはあるのですけれども、意外と一筋縄ではいかないところもあるのだなということを学びました。

ということで、話がまとまらないのですけれども、これまで日本の反アパルトヘイト運動についての記録が書かれてこなかったというのは、公開された情報がなかったということがやはり大きいので、今回こういう形で、立教大学に行けば誰でも見られる形で資料が公開され、そしてまた永続的に立教大学が続く限り、ということかもしれませんけれども、いつまでも見られる形で保存されるようになったのは、本当にありがたい話だと思っています。とくに、

---

<sup>16</sup> <http://www.biznews.com/leadership/2016/11/17/crawford-browne-guptagate-arms-deal/>

<sup>17</sup> <http://africanactivist.msu.edu/>

<sup>18</sup> <https://www.aluka.org/struggles>

<sup>19</sup> Keith Breckenridge. "The politics of the parallel archive: digital imperialism and the future of record-keeping in the age of digital reproduction." *Journal of Southern African Studies* 40.3 (2014): 499-519.

共生社会研究センターは市民運動に関するアーカイブズですので、先ほどからのお話にありましたが、日本の反アパルトヘイト運動は市民運動であって、ほかの市民運動とともにありながら、ずっと続けられてきたことを考えたときに、この立教大学の共生社会研究センターに入ったというのは、本当に、考える限りで、ベストの終（つい）の住みかだったのではないかと考えています。

この点に関して、本当に立教大学の皆さん、とくに共生社会研究センターの平野泉さんには本当に大変感謝しております。本当にありがとうございました。

すみません、長くなりました。これで失礼します。（拍手）

○司会（石井）　ありがとうございました。

国際連帯及び国際的なアーカイブの取り組みをお話いただくことで、より日本の状況を明らかにしていただけたかと思います。

これから休憩時間をとりますが、少し時間が押しておりますので、15分間の予定を少し短縮し、4時ぴったりに再開したいと思います。会場前方で資料を展示しておりますので、ぜひご覧ください。

**（休憩）**

○司会（石井）　それでは、4時になりましたので、再開したいと思います。

まず、立教大学大学院キリスト教学研究科教授の西原廉太さんにコメントをお願いいたします。

## **コメント　西原廉太（立教大学大学院キリスト教学研究科教授）**

皆さん、こんにちは。

本日の講演会、主催は立教大学共生社会研究センターなのですが、共催として、立教大学大学院キリスト教学研究科の名前も一緒に並べさせていただきました。

私は、キリスト教学研究科の教員で、現在、文学部長と文学研究科委員長をしております。同時に、聖公会の司祭でもございます。立教大学は1874年、聖公会の宣教師がつくったもので、聖公会の大学です。ですから、かつては聖公会の司祭で、かつ立教大学教授という人がたくさ

んいたのですが、現在では私一人になってしまいました。それでついこの間も、法学部の長老教授から、「西原さんは佐渡島のトキだから、絶滅しないようにくれぐれも体に気をつけて」と言われた次第です。

ご講演にもあったように、聖公会、教会、そして反アパルトヘイト運動の間には大変なつながりがありました。私も学部は京都大学の工学部で、金属工学をやっておりました。その学生時代、京大の中にも反アパルトヘイトの運動が、ある種ノンセクトの運動としてあって、そこに私もかかわっていました。同時にクリスチャン、キリスト者として、キリスト教の反アパルトヘイトの運動にも携わっていましたので、先ほどのお話にありましたように、外登法、指紋押捺拒否運動を通してつながっていったということになります。とくに関西ではつながりが強くて、そういう意味で今日お話いただきました楠原さんや、下垣さんは、私にとっては<sup>ジャイアンツ</sup>巨人のような存在です。また楠原さんは、パウロ・フレイレの『被抑圧者の教育学』の訳者でいらっしゃる。私はあの本を隅々まで熟読したので、そういう大先生とご一緒にこの場にいられることにも、感謝しています。

今回、反アパルトヘイト運動の資料が、立教大学の共生社会研究センターに収蔵されるといふ、これは私にとっても、立教大学にとってもうれしいことです。

きっかけは、それこそ先ほどのお話にありました、聖公会の司祭である原田光雄さん—原田さんは私の大親友というか先輩で、お世話になっている方です—に、マイノリティー国際会議が東京で開催されたときに久々に会いまして、そこで「立教に共生社会研究センターというのができたみたいだけど、資料頼めないかな」というお話があった。そこで当時、先代の高木恒一センター長にご相談したところ、センターもまだスペースの問題を抱えていた。私も副総長（当時）として努力し、その結果現在はセンターも施設を確保することができたわけで、ほんとうにうれしく思っています。

そこで反アパルトヘイト運動の資料寄贈の話が再度持ち上がり、共生社会研究センターにご相談したところ、快く「考えてみたい」とのお返事がありまして、ちょうど昨年でしたか、昨年の今ごろ、楠原さん、下垣さん、牧野さんのお三方にご来学いただき、最終的にめでたく立教大学に資料をご寄贈いただいたわけです。

先ほど牧野さんが、「立教大学のセンターに資料が寄贈されたことによって、今後の研究の可能性が開かれた」ということを言うてくださって、その点がとても重要なことだと私も感じました。立教大学も、がんばっていかなければなりません。

さて、先ほど楠原さんが、マイケル・ラプスレーについてお話してくださいました。ラプスレー

一は、ネルソン・マンデラやデズモンド・ツツとともに、アパルトヘイト撤廃闘争に参加し、1990年、ネルソン・マンデラが獄中から解放された3カ月後に、手紙爆弾によって両手と片方の視力を奪われた、そういう方です。

私は、2013年11月に韓国、釜山で行われた世界教会協議会 (World Council of Churches : WCC) の総会で初めてラプスレー先生にお会いし、総会全体に対して彼が出したメッセージに感銘を受けまして、彼が書いた本を翻訳したいと思ったのです。それで、先ほど楠原先生がご紹介くださった本を翻訳、監訳しました。

『記憶の癒し—アパルトヘイトとの闘いから世界へ』(聖公会出版、2014年) という本で、ご関心がある方はぜひお買い求めいただきたいのですが、この本を出版すると同時に、彼にぜひ、日本に一度来てほしいと思いました。

たいへんお忙しい、世界中を飛び回っている方なのですが、交渉の末、昨年(2015年) 6月に日本にお招きすることができました。

日本での講演会を開催するにあたって、マイケル・ラプスレーの生涯と、彼のメッセージに関する15分ほどのすばらしいビデオがあるのですが、それも合わせて紹介したいと思いました。それで日本語のテキストは私がつくり、立教大学のメディアセンターの優秀なスタッフに説明したところ、業務時間外に徹夜で取り組んでくれました。日本語字幕も入れて作成したこのビデオを、YouTubeで公開しています<sup>20</sup>。「ラプスレー」と検索していただければトップに出てきますので、ぜひご覧いただきたいですし、いろいろな形でお使いいただければと思います。

このラプスレーを招いたきっかけの一つが、WCCの総会だったわけですが、このWCCは5億6,000万人のメンバーがいる世界最大の教会協議会です。150名の委員で構成される中央委員会があり、その中央委員を、私は日本から一人選ばれて、務めております。WCCは、長年、反アパルトヘイトに取り組んできて、牧野さんのご報告の資料にも国際的な非政府組織として挙げていただきましたが、とくにPCR (Programme to Combat Racism) という暴力に抵抗する取り組みを1960年代から始めて、70年、80年、90年と継続してきました。

デズモンド・ツツ大主教も聖公会の人ですが、ツツ大主教は、WCCがとくにPCRプログラムを通してアパルトヘイト撤廃のために果たした役割について高く評価していただきます。このように世界のキリスト者は、反アパルトヘイト運動には深くかかわってきたのです。

そうしたつながりもあって、ラプスレーを日本に招くことができたわけですが、ラプスレーも、次のように語っていました。「確かに神学的アパルトヘイトのほうが、政治的アパルトヘイ

---

<sup>20</sup> 「マイケル・ラプスレー司祭の軌跡」 <https://www.youtube.com/watch?v=mCrNNco3XAc>

トよりも前から存在していた。19世紀には、白人キリスト者は、黒人キリスト者と同じ食卓につくことを拒否していた。その拒絶を正当化する白人の神学が、政治的アパルトヘイトの根源、源流となっているのである。」つまり、アパルトヘイトとの闘いは単に政治的、社会的な人権問題ではなくて、常に神学的問題であったということなのです。

ですから、立教大学キリスト教学研究科は、本日のこの集まりを必ず共催しなければならない。ひいては、聖公会がつくったミッションスクールである立教大学は、必然的にこの資料を大学の中心に置くべきである。そのように私は考えます。

デズモンド・ツツもラプスレーも言っているように、アパルトヘイトの根源は、ご存じのようにオランダ改革派教会の神学です。オランダ改革派教会は、1948年にWCCが創設されて以来の中心メンバーだったのですが、アパルトヘイトに協力したということで、1960年代にWCCから追放されます。オランダ改革派教会側は「脱退」と言っていますが、追放されて関係が途絶えるわけです。しかし、その後、オランダ改革派教会の中でも大きな変化が起こり、1986年には、「あらゆる人種差別を否定する」ことを宣言し、全ての人々が信徒になれるという方向へ変化していく中で、次第にオランダ改革派教会の中でも反省がなされるようになります。そして今年の6月、ノルウェーのトロンハイムで行われたWCCの中央委員会で、オランダ改革派教会は、アパルトヘイトにかかわったことの罪責を、教会として公式に謝罪したのです。それをもってWCCに、オランダ改革派教会が復帰する。そういう歴史的出来事が起こったその場に私も居合わせたわけですが、壇上でオランダ改革派教会の白人の教会代表と、南アフリカの黒人の教会代表が抱き合っただけでなく、涙を流しながら抱擁するという場面があって、それを世界の教会代表が、スタンディングオベーションで見守った。そうした歴史的な動きも起こっています。

ただ、「はたしてアパルトヘイトは解決したのか」ということですが、それに対してマイケル・ラプスレーは「そうではない」と言っています。彼は、「アパルトヘイトはまだステップ1が終わったところである」と、昨年、日本で話していました。まだまだ課題は残っているわけであり、反アパルトヘイト運動の資料が立教大学で保存・公開されるのは大変うれしいことなのですが、私たちは、これを歴史的資料としてただ収蔵するわけにはいかない。歴史的資料にするのではなくて、今、この時代でこの社会を構想するための「生きる糧」にしなければいけないと考えます。

とくに、トランプ大統領の出現やEU離脱、日本の政権の悲惨な状況などを背景に、排外主義や差別主義、ナショナリズム、あるいは反知性的な動きが蔓延するこの時代であるからこそ、私たちは、いただいた資料を「生きる糧」として、全ての人々の尊厳が守られる、全ての者たち

が解放された世界、これを神学的には「神の国」というのですが、そうした世界を実現するために取り組んでいかなければならないと確信しています。

まとまりのないコメントですが、感謝とともに、一言お話しさせていただきました。ありがとうございました。

## ディスカッション

○司会（石井） ありがとうございました。

資料をどう「生きる糧」にしていくかということは、これからの質疑応答でも、みなさんと深めていければと思います。

それでは、ここから質疑応答に入ります。

本日は3名の方から、それぞれのお立場で反アパルトヘイト運動とのかかわりについてお話しいただきました。多岐にわたる内容で、私も多くのことを学びました。先ほど西原先生もおっしゃってくださいましたように、私たちが今日の問題に取り組むにあたり、反アパルトヘイト運動の経験をどう生かしていけるか？といったことを話し合うのも、重要なことではないかと思います。では、ご質問のある方は挙手でお願いします。後日講演録を公開する際にはお名前は掲載しませんが、この場では差し支えない範囲で自己紹介いただいたうえでご発言いただければと思います。よろしくお願いします。

### 質問者 1

僕は、学生のときに、最後の最後に少しだけ関わらせていただいたという感じでしたが、その後、アフリカ政治史みたいなことを研究しています。

二つほど、主に楠原さんになるかと思うのですが、質問させていただきます。

人口登録法が91年に廃止されたときに、楠原さんが「名誉白人を返上する機会を日本人は永遠に失った」ということを書かれておられたのが、ものすごく印象に残っています。アジアとの関係だけではなく、私たちが歴史精算ができなかった、そのことのシンボルとしてこの問題があると思うのですが、それに関連して、今ここに来て日本の中で、何か「アパルトヘイト化」のようなものが強まってきつつあるのではないかという印象を強く持っています。

当時から外国人登録法の問題などと結びつけて運動されてこられたわけですが、例えば最近のヘイトスピーチの跋扈（ばっこ）であるとか、あるいは植民地以来の朝鮮籍というようなも



のと朝鮮民主主義人民共和国とを結びつけて、韓国籍と分けて登録させるとか、北朝鮮に渡ったら再入国許可を取り消されるのは承知のうえですといった誓約書を書かせるとか、あるいは朝鮮学校への補助金を文科省が打ち切り通告するとか、そうした、いわば「朝鮮アパルトヘイト」と思えるようなことが、今年だけでも立て続けに起こってきているという状況もある。

むしろ反アパルトヘイト運動が行われていた頃以上に、日本の状況は悪化しつつあるのではないかという感じがしているわけなのですが、当時の運動にかかわられた先輩として、現状をどのように考えて、そして、これは後の世代の私たちのだらしなさでもあるのですけれども、どんな教訓を考えられるかということ、少し伺えればと思います。

もう一つは、楠原さんの言葉で、アパルトヘイトが終わってしばらくたった頃だと思えますけれども、「日本というのは市民団体がなくなってきて、NGOばかりになりつつある」ということをおっしゃられたことがあって、それも印象に残っています。これは今、NGOが海外での活動と連携するようになってきて、それが時には、今の南スーダンもそうであるように、自衛隊の問題にも絡められてしまうというような問題が出てきてみると、実は非常に重要な点を指摘されていたのではないかと思うのです。あのときからもう20年以上たつわけですが、現代になってこの市民の組織というもののあり方を、どういうふうに考えられるだろうかということ、反アパルトヘイト運動の経験から、聞かせていただければと思います。

## 楠原

昔と変わらず難しい問題をお考えになっているのですね。いまどき希有な存在で、尊敬いたします。

二つの質問をいただきましたが、時間が限られているので簡単にお答えしたいと思います。

1991年に廃止された人口登録法は、アパルトヘイト根幹法の中でも非常に大きな法律の一つでした。日本人が名誉白人であるというのも、人口登録法が根拠といえれば根拠なのです。日本人の人口登録の問題について、私たちの大先輩である野間寛二郎さん—この日本で反アパルトヘイト運動を最初に立ち上げた方で、75年に亡くなられた—もそう考えておられましたが、日本人の責任というのは非常に大きかった。

その一つの根拠として、人口登録法の中で、日本人は名誉白人、honorary whiteという称号をもらったことがあります。野間さんたちの頃から、「日本人は名誉白人を拒否する」といったスローガンはあった。それは、僕らはずっと引き継いできた。つまり日本市民の手で、南ア政府に対して名誉白人という称号を返上したかった。「返上する」というのはどういう意味か。そ

れは日本がアパルトヘイト体制との癒着を断つということです。1988年のアジア・オセアニア・ワークショップ—これは日本の反アパルトヘイト委員会が東京で主催した唯一の国際会議です。その決議の中で日本人、台湾人（その後台湾人もhonorary whiteになったのですが）は、名誉白人ではない、我々市民はそうした、他人の苦しみを踏みにじるような称号を拒否する、という決議をしたのもそうした行動の一つでした。そして、我々の力で、政府や国会にいる人たちにも、「何とかならないのか」と相談した。しかしなかなか難しい問題で、「返上するといったって、相手のあることだから」という話でまったく進まない。しかし、相手がどう受けとめようと、日本の市民社会、国家として、こんなのは嫌だ、返すという、受け入れられないと言わなければならないと思いました。それで当時「日本・南ア友好議員連盟」の幹事役だった石原慎太郎さんには、はっきりそう言ったのです。でも石原さんは「いや、そんなことを言ったって、南アを怒らせたら、日本の経済成り立たないのだ。日本のレアメタルはみんな、南アから来てるんだから」という。これもお金の問題なんです。

そういうわけで、ほんとうに残念ながら、自然消滅というか、南ア・アパルトヘイト政権の滅びによって我々は名誉白人からは自由になった。情けないといえば情けないことです。

今の問題とのかかわりという点では、やはりこれから、こうした問題はまたどんどん大きくなると思います。そうすると、少し飛躍した言い方かもしれませんが、ほんとうに私たち一人ひとりのメシの食べ方を考えなければならない。

つまり、どういうメシの食べ方がいちばん平等な社会をつくるのかということを考えなければならないのです。「経済」という言葉はそれ自体悪い言葉ではないと思います。でも、メシの食べ方、金芝河（キム・ジハ）の言葉でいえば、飯を分かち食らうという原理以外に、人間社会の大事な原理はないだろう<sup>21</sup>。飯を分かち食らう社会というものを基本的に据えながら、市民社会をつくっていくというようなことをやらなければならない。今の食いでやっていけば、同じことを繰り返していく、しかも今度はもっと貧しい国から同じことを繰り返すというようなことを感じます。

もう一つは市民団体についてですが、日本の反アパルトヘイト委員会が終わった頃とちょうど重なって、いわゆるNPO法(特定非営利活動促進法)が成立する。これは国際連帯運動だけではないのですが、まあ90年代を境にして、NPO法案も通って、それからはNGO (nongovernment organization)、NPO(nonprofit organization)というものを中心にして日本の市民社会が組織されることになっていく。これはお金の問題とかかわっている。とくにNPO法案はお金の問題と

---

<sup>21</sup> 韓国の詩人・金芝河の詩「飯が天です」

かかっている、というのもNGO法案ではなくNPO法案だったわけですから。

その中でやはり、運動がODA(政府開発援助)など政府のお金に依存せざるを得ないようなシステムが生まれてきたのではないか。それは間違いないと思いますが、こんなことを言ってもしかたがない。いちばん大事なことは、ふつうの人間がふつうの組織で、ふつうの小さな市民グループで、自分たちで主張するというを一それをNPOと言おうがNGOと言おうが一市民運動として、やはり「活動」というより「運動」として組織していかなければならない。

世の中もだんだん変わっていて、子どものことなど社会的にポジティブなところのある運動に関しては、お金がつくようになってきている。その問題をどう考えていくのか。日本の反アパルトヘイト委員会の歴史ははっきりしていて、政府や企業のお金は一銭ももらっていません。もらったのは、キリスト者や仏教徒など、市民社会からだけでした。

現在のヘイトスピーチ、北朝鮮に対する「アパルトヘイト」の問題などには何も答えていませんが、一緒に考えて行きましょう、としか今は言えません。ごめんなさい。

○司会(石井) では私から下垣さんに同じことをご質問したいと思います。「反アパルトヘイト運動にかかわったご経験から今の状況を考えると、どのようなことを思われるか」というご質問だったかと思うのですけれども、いかがでしょうか。人種差別的なことが叫ばれるようになったり、あるいは世界的にも排外的な動きが強まってきたりというようなことに対して、何かご意見があれば。

## 下垣

そんなこと、私が言えるはずがない。それに、私が言ったところで、屁の突っ張りにもならないでしょう。ですから、そういうことを一緒に考えようかという場をつくるといえますか、そういうことは、僕はしたいなと思っています。

僕は今回、話の流れでたまたまここに座っていますが、こういう企画をするということは、今まで数え切れないほどやってきました。でも前に出てしゃべるとのこと、なんとなく理屈つけて、楠原さんみたいにかっこよく、聞いている人をだまくらかすということは、うまくできないですし、経験もないので、どうぞご勘弁いただきたいのです。

ただ、先ほども、名前を変えてまで、「関西・南部アフリカネットワーク」の世話人とか言いながら市民運動しているのは、そういう「つなぎ」をするぐらいの役には立つかもしれないので、そういうことは続けていきたいなと思っていますけれども、どないしたらいいんですか、

石井さん。

○司会（石井） では皆様のご質問を受けるということで。

○下垣 どなたか助けてください、本当に。

○司会（石井） 皆さん、助けてください。いかがでしょうか。

## 質問者 2

こんにちは。私は弁護士として、日本におけるヘイトスピーチを含む人種差別をなくすための人種差別撤廃基本法などを求める活動をしています。

私は、楠原さんのお話で『記憶の癒し』に関する部分をもう少しお話ししていただきたいと思っています。この本を読めばいいのでしょうか、人種差別に関する法整備の一方で、差別の被害者たちのあまりの苦しみを目の当たりにしているのです、その救済のために、法整備と並行して何をすればいいのかということ悩んでいるところです。それで、お話にあった加害者側の個人的・集合的記憶というのがどういう意味なのか、それがどういうふうに被害者の救済につながるのかというところがよくわからなかったので、ご説明いただければありがたいです。

## 楠原

これはラプスレー司祭の中心的なテーマです。つまりアパルトヘイトで何百年間も苦しめられてきたアフリカ人たちは、何代も何代も傷を受け続けて、もう狂い出しそうな記憶を持っているわけです。それが癒やされていくというのはどういうことか。そこでは彼自身が傷を受けたことがテーマになっている。南アフリカのケースであれば、「自分はアパルトヘイトの外側にいた」とか、「俺は関係ない」とか、「私はいいいキリスト教徒だ」とかと言っている南アフリカの白人側、加害の側にいた人たちが、自分の目の前にいる、狂うほどの傷を癒やされなければ生きられないような人たちと向き合っていく、そうした関係をつくらない限り、どちらも癒やされないのだというようなことを、ラプスレーさんはずっと言っている。だから、傷を受けた方と、「俺は傷なんか与えたことない」と思っている南アフリカの市民たちとを同席させて、合同でワークショップをやる。あの本はそういうことの記録なのです。

これを読んで僕が強く感じたのは、癒やされること、これは日本の問題でいうとよくわからないのですが、アパルトヘイトの問題でいえば、とくに南アフリカで3年なり4年なり、特権的な暮らしをした日本人社会の人たちなどは、僕らよりもう少し感じ取れる部分があるのではな

いかということです。つまり黒人から奪われた特権を、3年なり4年なり自分たちが享受して、つまり彼らから奪って、平気で一ほんとうに平気かどうかわかりませんが一生きてこられた。おそらく彼らは、アパルトヘイトに手を貸したとは考えていないだろうと思います。

でも、日本でアパルトヘイト問題が、人間の言葉や思想になっていくときには、そうした人たちも含めて、あれは一体何だったのか？が問われる必要がある。つまり日本企業で働いて、黒人労働者を使って、一人一人固有名詞を持つ黒人たちを、固有名詞ではなく「ボーイ」とか「メイド」としか呼ばなかった日本社会があったわけです。その人たちがその経験をどう捉え直すのか。彼らがそういう問題に向き合うことがなければ、アパルトヘイトで傷つけられた人たちが一日本人の場合は間接的でしょうけれども一癒やされることはないのではないかと。

在日朝鮮人問題や従軍慰安婦問題もそうですね。日本人があその時代に生きて、そこで感じた問題を、真に人間として語り合うようにならなければ、従軍慰安婦問題は解決しない。そういう問題と重なっていると思います。ですから、間接的当事者、知らない当事者のような人たちをどう巻き込んでいくのかということ、僕は最近強く感じるようになりました。あまりうまく言えないのですが。

○司会（石井） ありがとうございます。ほかにはいかがでしょうか。

### 質問者3

楠原さん、下垣さん、お疲れさまです。

牧野さんに質問です。牧野さんのご尽力で、私たちが残してきた大量の資料がまとまった形になってたいへんうれしく思います。牧野さんが日本の反アパルトヘイト運動のことを論文に書かれて、英語でも発表されたと思うのですけれども、それに対して、海外などから何か反響はあったのでしょうか。

### 牧野

ありがとうございます。また、いろいろと資料をご提供いただきありがとうございました。ご質問に対する答えですが、まだ確定版のような形での論文は書いていなくて、ディスカッションペーパー、ワーキングペーパーのような形で少しずつ出しています。また先ほど、SADETの2巻本のなかに日本の話がなかったということをお申し上げしましたが、そのSADETに連絡を取ったら、「会いましょう」ということになって会いに行ったところ、実は3巻目を今、企画

していて、要するに2巻つくったけれども、そこから漏れているものがいっぱいあって一例えばベトナムだとか、それこそWCCも入っていないのです。国連は入っているけれども、WCCが入っていないというのはいかななものか。やはり、さきほどお話のあったWCCのPCRのようなものも、当然入れなければいけない。それで、「3巻目を企画しているので、あなた書きませんか」ということで、実は書かせていただくことになって、とりあえずドラフトはできています。今後、これまでお話を伺わせていただいた方に広く読んでいただいて、いろいろと入れなければいけないことを入れる、間違っているのだったら直すといった過程も経た上で、最終版に持っていきたいと思っています。

私は、これが研究上の一番本職というより、どちらかというと、今の南アフリカのことを研究していることが多いのですが、そのために南アフリカにたびたび行く中で、この話をすると、「へえ、知らなかった」という答えが返ってきて、興味を持たれる。欧米中心、プラス、せいぜいアフリカぐらいまでしか広がってこなかったグローバルな反アパルトヘイト運動研究の、まだきちんとグローバルに丸まっていない絵の、これまで埋められていなかったところを埋めようという動きが、ちょうど今起きている。それが閉じ切ってしまう前にたまたまこういうことを始めたということで、すごく関心を持ってもらえるし、日本のことについて書きませんかという話は、別のところでもいただいたりするのです。

国際学会のようなところでお話ししたときに、一番興味を持ってもらえるのは、今日のお二方の話もそうなんですけれども、アフリカから物理的にも精神的にも遠い日本から反アパルトヘイトにかかわった人たちが、いかにアパルトヘイトの問題を自分事として捉えていたのか、つまり加害者性の意識のことです。そのシンボルとして、名誉白人の問題があった。「あそこに困っている、かわいそうな人たちがいるから手を差し伸べる」というのではなくて、まさに自分の問題としてかかわっていたということについて、「へえ」「なるほど」という反応が返ってくるのが一つ。

それから、私が話すときには、日本の反アパルトヘイト運動は、日本の中の差別問題、それは在日コリアンのこと、アジアとの関係もそうであるし、部落差別の問題もあるわけなんですけれども、そういう日本の中の差別問題にともに取り組んできたということ、非常に強調しています。

これについては、ほかの国でもそれぞれ自国の中に移民の問題を抱えていたり、アメリカの場合であれば、人種問題そのものを抱えたりしますので、ほかのところとも比べられる部分でもある。ともあれ、日本のこういう反アパルトヘイト運動のことについて、情報の需要はある

し、非常に興味を持ってもらえる。そういう状況で、そもそも資料がないと、あるいはとにかく情報を外に出していかないと、なかったことにされてしまう。

SADETの本の中に入れば、とりあえずある意味、公式の—SADETは、南アフリカのムベキ前大統領がイニシアチブを取ったプロジェクトなのです—南アフリカの現代史、現代政治史の一部に、日本の反アパルトヘイト運動が入ることになる。それは、私は大きな意味があると思います。日本と南アの関係について、これまで英語で書かれ、読まれてきたことの圧倒的に大きな部分は、日本がいかにアパルトヘイトに加担してきたか、経済的な理由で、いかにホワイト・サウスアフリカと強い関係を築いてきたかということ。そういうところを強調する文章は、森川純先生を初めとして、実は英語でもかなり書かれてきて、読まれてもいるのです。

それで、そのようなこと自体は知られているのだけれども、そういうことが書かれた背景には、実は、反アパルトヘイトという文脈があったはずなのですけれども、反アパルトヘイト運動自体については、実はあまり、当事者の方は書かれてこなかったということがあります。既に英語でかなり書かれている、日本の加害性についての話に加えて、それに対して異議を申し立ててきた市民の側のことが、両方書かれて、ようやくアパルトヘイト時代の日本と南アフリカの関係について、包括的な絵が見えるのかなと思います。

○司会（石井） ありがとうございます。楠原先生、どうぞ。

## 楠原

すみません。先ほどの『記憶の癒し』に関するご質問が非常に引っかかかっていて、ずっと考えていたので、もう少しお話ししたいと思います。

被害者と加害者というのがワンセットになって世の中をつくっている。ですから加害者—南アフリカの例もそうですが—は傷ついていないかというところではない。加害の悲しみとでもいうか、悲しみというのは、比較できないものだと思います。

どんなに豊かな暮らしをしているように見える人間も、どんなにいじめをやっている人間も、それぞれ内容は違っても、悲しみを持っている。僕はやはり、人間というのは悲しみでしか、そういう問題につながっていかないのだという気がする。

その悲しみを、つまり加害者なら加害者、あるいは傍観者なら傍観者であることの悲しみを掘り起こしていく。それを、被害を受けた悲しみと共有していく。それはまだるっこしいことです。つまり向き合うということ、いろいろな人が向き合うということです。

向き合うということは、ほんとうにいちばんまどろっこしい。というのも分業が成り立たないわけですから、専門家も成り立たない。真ん中には誰もいない。「我と汝」しかいない。そうした「我と汝」の間には人格的な関係しか生まれえない。そういう関係において、双方の深い悲しみのようなものを互いに感じ取れるような、向き合うための場を、僕らはたくさんつくっていかねばならないし、自分もそういう場に足を踏み入れなければいけない。

うまく言えなかったのですけれども、そんなことを考えていました。

○司会（石井） ありがとうございます。

#### 質問者 4

私は1988年5月に初めて楠原彰さんとお会いしました。その前から南アとかかわりはあったのですけれども、しばらく反アパルトヘイト運動にかかわらせていただきました。でも、わりと運動そのものとは距離をとっていたほうではないかと思えます。

というのは、私は翻訳者として、マジシ・クネーネの翻訳から、南アフリカに出会った人間なのです。1987年だったと思います。依頼されて始めたのですが、わけがわからなくていろいろ調べていくうちに、88年の秋にJ.M.クツェーという白人の作家の作品と出会って、以来ずっとJ.M.クツェーの本を訳しています。今もやっています。来年また出します。

そういうわけで、今、議論が加害と被害の問題になったときに、「あ、そのためには文学が必要だ」と私は思いました。つまりフィクションですね。もちろんファクト、歴史書も必要なのですけれども、フィクションを読むことによって、加害者が被害者になることができる、なってみることができるのです。その反対も、つまり加害者が書いたものに被害者になるということもできる。

逆に言うと、例えば女性の作家が女性を主人公にして書いた作品を男性が読むと、その人になってみることができるのです。非常に抵抗がありながら、なってみることができる。そうすると、考える、あるいは自分自身に対する疑問を持つことになる。そういうプロセスが、癒しのためには必ず必要ではないかと思えます。時間もかかるし、労力もかかるのですけれども、まさにフィクションはそれを可能にする装置なんです。

私は、市民運動からはちょっと距離を取った。それは、翻訳というのが、「たった一人でやる文化運動」であると思っているからです。これは藤本和子さんという、アメリカの黒人女性文学を翻訳したり、聞き書きを本にまとめたりしてきた人の言葉なのですけれども、その人を私



は、勝手に師匠だと思っているのです。34歳のとき、この「たった一人でやる文化運動」という言葉を聞いて、以来、ずっとそれを肝に銘じています。

だから、いつもパソコンや机に向かって、たった一人で何時間も、一日中誰とも話をしないような状態で仕事するのですが、いつも自分の中に対話がある。テキストと対話する、あるいは、作家はこれをどうして書いたのか、何を書きたいのか、この作品を生み出した背景はどうだったのか、といったことを調べながら、考えながら、ずっとやってきているのです。

現在も訳しているJ. M. クッツェーは、1940年にケープタウンで生まれた人で、60年代に10年くらい、イギリスのロンドンとアメリカのオースティンに行き南アから離れた時代を除いて、62歳までケープタウンで大学教授をやりながら作品を書いてきた人なんです。

それで、彼と会って話をしたときにも感じたのですが、遠く日本から南アフリカを見ていると、白人対黒人のように単純化して語られ、そう見えもした時代があった。でも実際は、いかなるグループの中にも加害者と被害者がいる。つまり白人対黒人ではないのだと。白人の中でも、もちろん良心的な白人もいれば、全く痛みも感じず人を殺す人もいる。でも黒人の中にも、理由はいろいろあるかもしれませんが、体制にすり寄ったり、同化させられてしまったりした人たちもいる。そうした個別の問題として見ていかないと、見落としてしまうことがあるのではないかと。そして、それをすくい上げるのは文学だろうと私は思うのです。

ですから、場をつくるというときに、読書会というのは、私はとてもいいと思います。

○司会（石井） ありがとうございます。

あつという間に終了時間が近づいてきたのですが、あとお二人からご質問をお受けしたいと思います。

## 質問者 5

私も1980年代後半から反アパルトヘイト運動にかかわるようになって、楠原さんの本もたくさん読み、下垣さんからもお話を聞きながら活動してきました。その後、南アフリカの現地で国際活動をして戻ってきた今、一番関心のあるのは、日本の中に住んでいるアフリカの人たち、またアフリカにルーツを持つ子どもたちにとって生きやすい社会を、どうやって彼らとともにつくっていくかということなのです。牧野さんと一緒に、反アパルトヘイト運動についていろいろな方にお話を伺う中で、1970年代、ケニアからの最初の留学生として、ムアンギさんが日本に来られた。そしてたくさんの方が、ムアンギさんと出会う中で、アフリカを感じ、知り、

理解してきたということをお聞きしました。

ムアンギさんのような存在は、とても大きかったと思うので、少しその辺のことを聞きたいというのが一点と、もう一つ、今の日本で暮らすアフリカ出身の人たちとか、アフリカにルーツを持つ子どもたちが、いじめとか差別とか区別とか、まだまだ住みにくい状況がある中で、どういうふうにしていくことが大事だというふうにご考慮されるかということ、楠原さん、下垣さん、牧野さんに、時間があれば少しお聞きしたいと思います。

ムアンギさんに聞ければ一番いいと思います。

○司会（石井） それではもうお一人方。

## 質問者 6

現在、日本と南アフリカの関係などについて勉強している学生です。

反アパルトヘイト運動は、まだ僕が生まれていなかったときの運動だったので、当時活躍していた方々のお話を聞いたのは、とても貴重な機会でした。

質問が2点ありまして、まずは牧野さんにお伺いします。白人、黒人の融和は現在の課題だと思うのですが、そのために現在南アフリカで行われている教育での取り組みについて教えてください。また、皆さんにお伺いしたいのですが、戦前の日本の「アジアの一等国」、あるいは戦後だったら「世界2位の経済大国：日本」といった、ほかのアジアの国と日本は違うという「一等国」的な意識があるから、成長する中国に負けたくないという気持ちになって、そういう気持ちが現在の排他的な方へ向かっているかなと思うのです。ですから、新しい日本人としての多文化共生のためのアイデンティティーのようなものをつくっていく必要があると思うのですが、日本人が多文化共生のためのアイデンティティーをつくっていくためにどうしたらいいのか、反アパルトヘイト運動の中の経験を踏まえて、お考えを伺いたいと思います。

○司会（石井） ありがとうございます。

お時間がそろそろ迫ってきましたので、お名前が出たムアンギさんに、もしよろしければ一言ご発言いただき、あとはお三方に順番にお答えいただくと同時に、それぞれ締め言葉いただければと思います。よろしくお願ひいたします。

## ムアンギ

とくに言うことはないのですが...私は日本に来てから42年になります。今、四国学院大学の特例教員で、実際はもう定年でリタイアしているのですが、「平和学」の教員がいなくなると困るので、コーディネーターとして残ってほしいということで、そうなっています。

日本に来たときには、こんなに長くいるとは思っておらず、長くても3年だろうと思っていました。奨学金が終わったら、ルールとして国に帰らなければならなかったのです。ですから、どうしてこんなに長くいるのかといたら、楠原さんと、その隣にいる下垣さんがいたからだと私は思います。

というのも、日本に来たのが1974年ですから、モザンビーク、ギニアビサウ、アンゴラが解放されて、いよいよ南アフリカの解放が可能に思えてきた時期です。前線諸国というグループまでできて。ですから日本に来るときには、「アパルトヘイトの問題を知っている人いるのかな？反アパルトヘイトの運動はあるかな？なかったらつまらないな」と思っていました。

そして、楠原さん、下垣さんや、反アパルトヘイト運動の人たちと会って、運動して、日本がもともと好きでもあったし、日本に長くいる意味もあると思うようになった。南アフリカだけじゃなくて、ケニアにも50年代には、アパルトヘイトではないけど、カラーバー (colour bar) という名前と同じようなものがあって。南アフリカとジンバブエとケニアは、歴史的につながっている。同じ白人グループが、ケニアがもう無理やと、ローデシア [=ジンバブエの植民地時代の国名] に行って、ローデシアがまたダメになったら南アフリカに流れてきたということもあって、やはりこの問題は、我々の問題というふうにケニア人は思っていた。少なくとも私はそうだった。大学の時代、ナイロビの大学の時代に。

だから、日本に来て、そういう人たちがいるということとはとてもうれしくて、ずっとつながり合っていこうと、日本が残るわけができた、と思っているのです。

○司会 (石井) 心温まるお話、ありがとうございます。

それでは、講演者の皆さまから、下垣さんから順番に、お願いいたします。

## 下垣

ムアンギさんと私が初めて出会ったのは、近鉄奈良線の電車の中だったと思います。ムアンギさんが日本に来られて、最初、大阪外国語大学で日本語の研修を半年ぐらいされていた。その寮が、東花園という、ラグビー場があるところにありました。今はもう大阪外大は消えてしま

いましたが、実は私もその電車に乗っておりまして、たまたま乗り合わせた。肌の色が違うから、見ればすぐわかるので、声をかけた記憶があります。

初めはそういうことなのですが、ムアングさんとのことで、一つご紹介しておきたいことがあります。あるとき、日本語の表現で、「族」「部族」という表記のことが、私たちの間で話題になったのです。そのときにムアングさんに「どう考えている？」「どう考えたらええの？」と伺いたくて、学習会でお話ししていただいたことがありました。いろいろ話してくださったのですが、僕が覚えているのは、「あなたら、アフリカの人を『何とか族』と言うのやったら、日本のアイヌの人を『アイヌ族』と言わな、それおかしいんちゃう？」というような話をされた。これはたぶん記録に残っております。文字にして、通信のどこかに載せておりますので、こちらのセンターで確認できるはずですが、そんなことがあったのを今、思い出しました。

最後のまとめになるかどうかわかりませんが、今回、立教で資料を預かっていただきましたので、私が今、考えていることは、私は研究者ではないですから、「ここに資料があるよ」ということ、その存在をいかに一人でも多くの人に伝えていくか。その方法をどうしたらいいのかといったことを考えています。

先ほど西原さんもおっしゃっていましたが、やはり置いておくことが目的ではなくて、それを見てもらって、使っていただかなければ意味がない。ですから、そのためにもまず、「ここにあるよ」ということを伝えていきたい。今日参加していただいた皆さんも、ぜひそういうことを周りの方に伝えていただければと思いますし、私もそういう手だてをしていきたい。そんなことをぼちぼちと続けていきたいと思っております。ありがとうございました。

## 楠原

今日は本当にいろいろな方が来られた。活動していたときのこの人たちの声は、大体みんな資料の中に記録されています。写真も含めてです。

それで、今日のお話を聞いていて、先ほどの若い方からの質問にも関連して、つまり「どうしたらいいのか」という問題ですが、「隣人」という言葉がありますね。この隣人、隣にいる人との向き合いが、日本では制度的にどうもできない。会社の人とは会社の人しか会わない。大学生は同じ大学の学生しか会わない。隣にいるごく当たり前の女性や障害者や外国人や移民労働者や、そういう人たちがたくさん、半径50メートル、100メートルぐらいの間にもたくさんいるのに、出会えない。これがやはりほかの国と比べても、非常に大きな問題だと思うのです。マイノリティーや、悲しみを持っている人は、周りにいくらでもいる。そういう人に出会えば、

自分も悲しいんだと思う。男も悲しいし、女も悲しいし、どこかで弱い。だって大学出ても、半分くらいの人しか就職できない。こんなに悲しい、やりきれないんだ、ということをみんなで言い合えるような関係は、隣人と向き合うしかないのです。

だから、自分の家の中に、どういう人たちに入ってきてもらうかという当たり前のことが、いちばんたいへんなんです。でも、それをやっていく以外に、本当に立ち直れないような悲しみを持った人たちが救われるというか、癒やされることはないと思います。

先日の障害者殺傷事件<sup>22</sup>のように、日常の暮らしの中において、他者がいるにもかかわらず、他者を選んで排除して、我々の暮らしが成り立っている。そのことは、僕は僕なりに地域でいつも考えている問題ですし、そういうことをやっていく以外に、アパルトヘイト問題の根源に突き刺さっていくことはできないのではないかと。

本当に被害を受けてきた南アフリカの黒人が、差別する側にあった南アフリカの白人の話を聞く。そのときに、白人が泣くんです。「私の悲しみは、黒人の皆さんにはわからないだろうけれども」と言って泣く。そのときに初めて、息子を殺された黒人の女性が、「私は白人を許す、あなたを許すことができる」と言う。こういう関係を、隣人と、日常の中でつくりたいのであれば、我々が日常的なワークショップをつくっていく以外にはないと思います。以上です。

## 牧野

最後にマイクが回ってきてしまって、締められるようなことは全然言えそうにないのですが、それでも。ただ、反アパルトヘイトについて、日本の運動の記録もそうですし、グローバルに見ても、アパルトヘイトや人種差別と闘ってきた記録というのは、まさに、今、必要とされているのではないかと。

何人かの方がお話しされたように、今まさに日本で起きているアパルトヘイト的なものが、よりひどくなっているように見えるなかで、日本の反アパルトヘイト市民運動の経験というのが、まさに今、参照されるべき経験である。同じように、南アフリカでも、もちろんアパルトヘイト体制は終わったけれども、ではアパルトヘイトは終わったのかということ、やはりそうではないということがあると思うのです。

ご質問でポスト・アパルトヘイトの人種融和の話をいただきました。もちろん、アパルトヘイト体制が終わった後に、とくにマンデラさんの政権のときに、人種融和の試みがいろいろさ

---

<sup>22</sup> 2016年7月26日、神奈川県立津久井やまゆり園（相模原市、障害者支援施設）で起きた殺傷事件のこと。

れていましたし、南アフリカは「虹の国」というふうに、一瞬見えたのですけれども、それから20年たって、今の南アフリカを見たときに、やはり、そのころはそういうふうに思えたというか、そう思いたかったけれども、やはりそうはなっていない。

今、もちろん制度的な人種差別はないけれども、いまだに人種的な壁というのはあるし、今でも人種差別、レイシズムにかかわるような事件というのは、たびたび起きている。ただ、南アフリカでは、そういうことが起きた後に、社会的に許容されなくて、ものすごい勢いで、パッシングというか、これはいけないことだということも一緒に回っていく。日本では、人種差別的なことがあっても、そのままスルーされてしまうのに比べると、南アフリカでは、人種差別的な事件はよく起きるけれども、それはだめだという規範も同時にある。でも人種融和が起きているかという、そうではなくて、表には出さないけれども、心の中の人種主義はずっとある。残念ながら、教育によって、そういう人種の壁が取り除かれているという状況にはなっていないと思います。そういう意味で、アパルトヘイトとの闘いの記録というのは、南アフリカにとっても、常に参照し続けるべきものです。それは南アフリカをこれからどうよくしていくかというか、悪くなってきているように見えるものを、どう反転させていくかということを考える上でも、とても大事です。

さきほど、スウェーデンの話で、反アパルトヘイト闘争を支援したという記録が、ある意味、権力者にとっての資源になるという話をしました。もちろん今の与党であるANCにとって、自分たちが解放闘争を闘ってきたということは、権力の大きな源泉です。でも、それと同時に、そこで何が目指されていたのかということ、記録があることによって、常にANC、権力者に対して、突き返し続ける、「あなたはこの理想のために闘ったのではないのですか」と突きつけることができるというのも、やはり記録があってこそなんです。その意味でも、反アパルトヘイトの記録というのは、単に歴史的な資料というだけではなくて、まさに今、日本でも南アフリカでも世界でも参照されていくべき資料だなと思います。

本当にその点でも、今回、立教大学で資料を保存していただけるのは、本当にありがたいことです。感謝いたします。(拍手)

○司会(石井) ありがとうございます。

今日は本当に反アパルトヘイト運動という文脈を越えた、大きな示唆をもらえるお話をしていただいたと思います。ありがとうございます。

まだまだ伺いたいのですけれども、もう時間が過ぎてしまいましたので、質疑応答はこれで

終わりにしたいと思います。

最後に、センター長の沼尻のほうから、閉会のご挨拶を申し上げます。

○沼尻 今日長時間にわたり、本当にありがとうございました。

おかげさまで、私も反アパルトヘイト運動については、学校で習った程度の知識しかなかったのですが、短い凝縮された時間の中で、単なる知識というよりも、人の生き方といますか、姿勢といますか、そういう点で学ぶところがとても大きく、有意義な時間を過ごすことができました。

ぜひ立教大学を永續させて、資料を末永く後世に伝えていきたいと思っております。またこのような機会をつくれればと思いますし、皆さんからもご協力を賜ればと思います。

今日は、本当にどうもありがとうございました。

以上

\*URLは全て2017年12月7日最終確認。

-----  
[謝辞]

本公開講演会の開催、および講演録の作成にあたっては、講演者のお一人である牧野久美子さんを研究代表者とする JSPS 科研費 JP26380227 の助成を受けました。この場を借りて、御礼を申し上げます。

---

立教大学共生社会研究センター主催公開講演会

「反アパルトヘイト運動を記憶する」(2016年12月17日開催)

講演・質疑の記録

---

発行日：2018年2月1日

発行：立教大学共生社会研究センター

171-8501 豊島区西池袋3-34-1 電話：03-3985-4457 Fax：03-3985-4458

E-mail: [kyousei@rikkyo.ac.jp](mailto:kyousei@rikkyo.ac.jp)

\*発行にあたっては、基盤研究(C)「反アパルトヘイト国際連帯運動の研究：日本の事例を中心として」JSPS 科研費 JP26380227(研究代表者：牧野久美子)の助成を受けた。